緊張するを覺えた。

『お嬉しう存じます。』

友江は思はず兩手でフツクリした我胸を抱き占めて涙ぐむだ。

變を聞いて、清涼亭の血氣な若い者も、彌次馬に飛び出した。藤助を案内に、信濃守と友江、續く四五人の若者は、粹勢な刺青に空元氣を見せ、廣小路を斜に御徒町へと一氣に駈け附けた。

『アレ彼處でムいます。』

藤助が指さす彼方には、早くも七八人の人だかりがして、ワヤ〳〵罵しり騒いで居た。

『何だつて、恐ろしい大きな音でしたからね。俺や大筒を射たれたかと思ひやしたよ。末だに耳が聾になつてます。』

『何處の方だか、飛道具にや協はねへ。早く自身番から來て呉りやいゝのに。』

七人は十人になり、二十人になり、物見高き人々は恐い者見たさに遠巻に寄りこぞつた。



『コレ殿様だ……退かねへか。』

清涼亭の若い者は、慳貪に群集を押退けつゝ、信濃守と友江とに道を明けさした。

『オウ清之助殿ッ。』

『貴君ッ。』

信濃守が抱き起した死體は、右の肋を只一發に射拔かれて。虚空を摑むだまゝ、疾に絶切れて居た。

友江は呀と言つた切、餘りの事に二の句が繼げなかつた。

『貴君、妾でムいます。お氣が附きませんか。……御前様も入らつしやいます。』

友江は我に返ると共に、良人の耳の根に就いて、聲を限りに叫んだ。

『高野氏、永井ぢや。高野氏、』

幾度も搖り動かすけれども、身體は次第に冷えて行くばかり、主なき魂魄は闇に消えて呼べども歸らぬ。

『殘念至極の事を致した。』

信濃守は的もなく虚空を睨み詰めた。友江は萬感交も臻まつて、只歯切をするのみ、肉附きのいゝムツチリした身體が、張り切れんばかりに硬ばつて了つた。

『彼奴等は果して大暗殺の手を擴げたものと見えるわい。……先日身共に心附を致して呉た人が、反つて不慮の災難に遭ふとは、全く存じの外ぢも。』

『御前様、何者が清之助を手に懸ましたでムいましやう。』

友江の聲は銀線のやうな顫えを帶びた。

『多分は左膳の一味とは存ずるが、……兎も角一刻も早く御住居へ引取るやうに致さねばならぬ。』

信濃守の指揮に因つて、若い者は死骸を高野の屋敷へ運び入れ、其向々への届けを濟した頃には、長き秋の夜もほの〳〵と白むで了つた。

屋敷の中は上を下への騒動、鼎の湧くが如き騒ぎの中に、現場近くに落ちて居たと言つて、近所の者が烟草入を拾つて來た。赤銅の千匹猿の目貫印傳革の叺、中々凝つた物だと手から手に廻されるが、唯一人心當りの有る者はなかつた。



『どうぞ一寸見せて下さいまし。』

友江が夫を受けた時に、忽ち顏色が泥の如くに變じた。紛れもなく此持主は、養ひの父、とした誰ケ袖の源兵衛の持物で有る。偖はと思ふと、友江は身動きならぬ悶えに縛られてゾクト浮く冷汗が、滑かな脊筋を玉の如く流れた。

## 蛇貪ふ雛

良人が不慮の横死は、長州方の刺客の所爲とは言へ、自分が裏切つた怨みを、良人の上に移したのだと思ふ證據は、殺害の場に落ちて有つた千匹猿の目貫を金具にした印傳革の煙草入、夫が疑ひもなく養親の源兵衛のもので有つたからだ。

左膳が四歳になつた我身を浚つて來て、誰ケ袖の源兵衛に育てさしたのは、敵の子とは言へ、他日の用に立てやう爲に、女一通の藝も仕込んだり、重役へ行儀見習ひにもやつたのだ。而して兩國へ誰ケ袖を開いてからは、留守居茶屋の娘分として、多くの客にも接し、好めば舞の手振も見せ物にさせたので有つた。

我身を間諜の役にも使つたけれど、子として隨分寵愛したもので有つたのが、一朝清之助に身を寄せて、公儀の敵を呪ふやうになると、無念の腹慰を、我身に報ひずして、良人の上に移した。夫は清之助さへ無ければ、自分の心が、再び元へ戻ると思つたので有らう。

然し自分が左膳を親の敵として斬りかけた事を知つたならば、假令清之助を討つとも、我心の轉ばし難きを知つたであらうが、殆んど同じ刻限に事が突發したので、源兵衛には池の端の變事が知れなかつたので有る。彼の待ち設けて居る音信といふものは、永井信濃守が蓮見橋で暗討にされた事で、續いて清之助が殺されたので有るから、一夜に公儀の大切な役人二人まで殺して、會心の笑みを洩らしたに違ひない。少なくとも彼が小梅の寮に歸つて左膳の落着が解る迄は、雀躍喜びに嘯いて居るので有る。

友江は良人の敵として、源兵衛を討つ事の可否を胸に問ひ胸に答へて見たが、後から後へと、種々な雲が湧き上つて來て、少しも決心が附かなかつた。

親の仇として左膳を覘ひはしたが、我身の背丈を延して呉た源兵衛を、良人の敵に取るのは親に刃を當るにひとしいといふ怯れが、友江の滑かな白い肌の血を躊躇さした。



良人の三七日は濟み、遺恨の魂は夜な〳〵夢の懷に入る。信濃守が後援をして呉るとは言へ、友江は天にも地にも倚頼ない一人ぼつちとなつた。

我家に舅は有るが、今は老衰して昔の元氣はなく、一門一族の言ひなり方第なので、我身を眞實清之助の妻と見るや否やも解らない。夫は親類の者の取扱が、召使でも有るかのやうな、ぞんきな態度で解る。

亡良人の位牌に別れて、高野家を出ねばならぬ運命が迫つた時、友江は頼む木蔭に雨が洩つて、身を寄せるに處が無い。

友江は我身一人の始末が附き兼るやうな女ではないが、高野家を離れて　江戸中を流浪する寂しさを思ふと、氣が滅入るやうになつた。

其間にも友江は窃に小梅の寮を探つて見たが、源兵衛は影も形もなかつた。どうやら上方の方へ旅立つたらしい樣子だと云ふので差當つて怨みを晴らす的も無くなつて了つた。

殊に友江が氣に懸つてならぬのは、下男の三吉で有つた。蓮見橋の夜、我身を誘ひ出したのは、決して僞りならぬ好意だつたのは、危急の際に左膳に絡まつて呉たのでも分るが

彼切姿を消して、今以て音信がない。

如何に物騒とは言ひながら、大の男が消えて失くなる筈もない、誰に聞いて見ても、三吉の消息が全くないといふのが、友江に取つては、少なからざる不安で有つた。

其中に御親發の噂が漸々高くなつて、江戸中は割れ返るやうな騒ぎとなつた。剩さへ天下副將軍の水戸家では、尊王佐幕に藩論が別れて、正奸兩黨が鎬を削つて爭ひ、江戸へも軍勢が寄せて來るなどいふ噂高く、押込强盜剽盜辻斬などゝ、氣味の惡い話が、怯えた人々の耳に雜然として響いた。

殊に淺ましいのは、天下御直參と稱へて、肩で風を切る旗下御家人の面々が、戰と聞いて狼狽へ廻り、成るべく御供に當らぬやうと、神佛へ祈りを上げ、妻子は泣きの涙で立騒ぐ。三河以來の武士の血は涸れ盡して、丈夫の魂はグダ〳〵に腐つて了つた。

友江の居る組屋敷の隣近處でも、此樣な愁歎が繰返される時、友江は其心の甲斐なさに呆れ、之では御上洛の結果も覺束ないと思ふと共に、恁る人々を働かせねばならぬ公儀の重き役人、殊には永井信濃守の苦心を思ひ遣つた。



突然信濃守から案内が有つて、内密屋敷へ尋ねて來るやうにといふ來翰なので、友江は急いで出向いた。

門内には人の出入が多く、名札附の荷物などが出て居るので、主人の上洛も近々に迫つたのだなと思ひながら、内玄關から奥へ通されると、信濃守は常の居間へ友江を招いた。其席には奥方も侍つて、極内輪な密談が交された。

『友江殿拙者も彌々明後日、御先供として上洛致す事になつたよ。……長い別れにならうも知れぬて。』

信濃守は微笑を泛べて、冗談のやうに言つたが、内心に深い決意の有るのは、刻み込まれた眉宇の皺に現はれて居る。

『夫は御名殘惜しう存じます。』

友江は目に泣かぬけれど、心に深い悲しみが滲み通つた。貧て敵として狙つた此人が、今は廣い世の中に、只一人の味方とも後援とも恃むばかりで有る。

『御役柄は是非もない事で有りますのう。』

奥方は愁然として居た。

『平生高祿を頂戴して、有るか無いか知れもせぬ戰を請合つて居る以上、いざ鎌倉となれば、第一番に出陣は覺悟の前だて。』

御直參全部に此意氣組が有れば、長州は愚か、日本中を敵に取つても恐れる事はないものをと、友江は少し氣に勇みが出て來た。

『其處で友江殿、清之助殿を殺した下手人ぢやが、拙者は隨分と探索致させたが、皆吳樣子が解らぬので、其許へ知らせる事もならず、隨分心痛致したが、昨日探索方からの知らせには、右の曲者は、清之助殿に危害を加へると其儘、上方へ逃げ登つた趣、多分は長州へ參つたであらうと申す事ぢや。尤も出沒窮まり無き不思議の曲者ぢやに因つて、歸つたと見せて、又京へ登つたか、乃至は江戸へ出府致したも知れぬが、恐らくはまだ彼地に居らうと言ふ事ぢや。』

『種々と御心配を戴きまして、御禮の申しやうもムいません。然し其下手人の凡そ誰といふ事は、若しお解りでムいましやうか。』



友江は信濃守の口から、源兵衛の名を聞くを、恐い者に思ひながらも、判然と聞かねば氣が濟まなかつた。

『大凡は相分つた。』

『では矢張』

友江は思はず膝を進めた。願はくは源兵衛でなからん事を心から祈つたので有る。

『御身にも見當は有る筈ぢや。』

信濃守も現はに源兵衛と指す事が、友江に苦痛を與へるものだと思つて、明らかに言ふに忍びなかつた。

『矢張煙草入が證據でムいましたでしやうか。』

『是非もない事ぢや。』

溜息と共に言つて、奥方と顔を見合せた。友江の美しい顔は、何時しか蒼白くなつて、血の氣も通はぬばかりだつた。

『戰國といふでも無いが、世の中が騷々しく相成ると、各自が仕へる主人の爲には、心に

もない惨い事も致すものぢや、源兵衛が御身の配偶と知つて、清之助殿を殺したのも、恐らくは御身の心を元へ翻へさせる積りで有つたらうが、煙草入の證據を殘したのは、反つて怨みを買ふ元で有つた。誰ケ袖一味の考へでは、當時左膳に拙者を殺させ、一方には清之助殿を殺し、一時に目の上の瘤ばゆい癪を除いて、御身を元へ引戻し、相變らず手先に使つて、公儀役人の樣子を捜らせやうと致したのぢやつたが、反つて左膳が召捕られたに因つて、一味は殘らず本國へ引上げた事と存ずる。』

『夫ではモウ主人の敵は討てないでムいましやうか。……折角親の敵を討ち洩らしましたのに。』

友江は倚賴の無い寂しさを染々と味はつた。

『左膳は揚屋へ召捕つて、昨今吟味調べ中で有る。如何に引腰の無い牢役人でも、よもや取逃がす事は致すまい。敵は上で討つて下さるから、安心致されるがよい。只清之助殿の敵の源兵衛ぢやが、御身は永年彼奴の養育を受け居る。苟にも娘分で有るが、能仇を復す心が有られるかな。』



『ハイ、親とは申しながら、妾の生の親を殺したばかりに、是非なく賴まれて育てゝ呉ましただけ、言はゞ餘儀なしでムいますから、妾は良人にはかへられませぬ。』

友江の蒼白き顏には、鮮かな血の色が浮いて來た。

『オウ夫でこそ高野氏の內室ぢや、其覺悟が有るならば、小さい敵を打たずと、大きい敵を打つては呉まいか。』

信濃守は威の籠つた眼に、凝と友江の顏を見た。

『大きい敵と仰せ遊ばすのは。』

『夫は恁樣の次第ぢや、源兵衛は成る程良人の仇には相違ないが、源兵衛とても私の慾心より致した事ではない。主と崇める長藩の爲に、何かと妨げになる上役人として、清之助殿を討つたのぢや、其所業は憎むべきも、心に一點の私はなかるまいと存ずるな。』

『ハイ、夫は左樣かも存じませぬが。』

友江は信濃守の顏を瞠めて片唾を呑むだ。

『ぢやに因つて、御身が敵として、源兵衛を覘ふのは如何にも尤もながら卽ち小なる敵で

有る。源兵衛は必竟手を下したといふに過ぎないで、其後には彼奴を指揮する大きな敵が控へて居るのぢや。』

『憚かりながら、夫は何處の何者でムいましやう。』

友江は怪訝な顏附で有つたが、女ながら軒昂たる意氣が、黑目勝の生々した眼に冴えた。

『源兵衛の後の大立物と申すは、長州藩といふ公儀の大敵ぢや。公儀に於ては、前角より隱密を入れて、樣子を搜らせては居るが、拙者手許へ直には參らぬに因つて、何分にも委しい樣子が知れぬのぢや、其爲目安の立たぬ事も有るぢやて、御身誠に大きな敵を打たうとならば、長藩へ入り込むで樣子を搜つては呉まいか。』

日外公儀の御役を勤めやうと言つた時に、追つて賴む折もあらうと言つたのは、此下心で有つたかと、友江は始めて點頭いた。

『妾に勤まる事でしたら、どんな事でも致しますが、どうした手蔓で彼方へ入つたら宜しうムいましやう。……誰ケ袖時代、長州の方には、隨分御懇負になりましたので、御知已は澤山有ると存じますが、左樣いふ方々は妾の今の身の上を御承知でムいますから、直に覺られやうかと存じます。』



『夫は敵の謀計に就いて、謀計を行ふので、源兵衛が御身を元の鞘へ戻さうと致し居るのぢやから、其企みに欺まつたと見せて、彼方の手に附き、公儀の隱密を致しては呉まいか先方の手段に墜る事なれば、よも疑ひは致すまいと存ずる。』

『では長州へ下りまして。』

『差當り源兵衛の誠の在り家を取紀さうと存ずるから、御身は後から京へ登つて參られるがよい。』

『數ならぬ妾、御用に立ちますれば、お嬉しう存じます。』

友江は緊張した心を少し緩めて、始めて莞爾笑つた。其妖艶なる態度は、信濃守をさへ恍惚たらしめるので有るから、隱密として敵地へ入り込ませる時、如何に疑ひ深い者でも蛇食ふ雉と思ふ者は有るまい。

## 若い後家

農夫牢や無宿溜と違ふけれども、同じく日の目を見ぬ牢内、狹い檻の中へ鮨詰になつて居るのは、勤王方の浪士や、辻斬追落しの武士、夫も多くは質物で、浮浪人が多かつた。

四木左膳は蓮見橋で不覺を取り、信濃守の手の者に因つて召捕られ、御膝元取締から、牢役人の手に引渡され、揚屋入りになつたので有る。

生きた死人の投込と言はれる牢へ入つては、萬事休すと思つたけれども、當時市中の取締を預つた酒井家の手の者も、奉行所の與力達も、信濃守が彼等を出し拔いて、自分の手で左膳を召捕つた事が、鼻毛を拔かれたやうな氣がして、內心不愉快でならなかつたので、宛ら預り人の如く、一回の調べさへ無く、揚屋へ入れ放しにして置いた。

罪の無い者が、恁して日の目の無い處へ永く捨られるは苦痛では有るが、首が二つ有つても足らぬ左膳は、長く調べの無いのが、寧ろ幸ひで有る。



如何に都合次第でも一回の調べをせぬ中に、罪に行ふ事は無いから、其中に如何なる幸ひを得て牢脫が出來やうも知れぬと、覺束ない一縷の望みを繫け、萬一の機會を狙つて居たので有つた。

其中は長州征伐が始まつて、江戸中が引繰返るやうな騷ぎだと言ふ事が、新入に因つて傳へられた。

夫を聞いた四木左膳は、矢も楯も堪らぬ思ひに湧り立つた。小さな防長二州が天下の兵を引受けて戰ふ時、一兵だも惜しい折柄、心も空に飛んで行きたかつたが、迂濶に牢脫が出來るものではない、況して公儀膝元の傳馬町の牢屋敷、假令逃れたからにして、直に召捕られるに知れて居る。左膳は揚屋の上席に構えながら、頻りに脫獄の工夫を凝して居た。

すると農夫牢も無宿牢も一杯だといふので、侍以外の囚人を、少時揚屋へ預る事になつて、幽靈のやうな男共がドヤ〳〵と送り込まれて來た。

髮は蓬々として、肌は塵埃に塗れ、濕疹疥鮮に惱むで浮世の姿の見る影もない男共が、入口の板の間に列べられた。

『新入は牢内の掟に因つて、極め板を當て吳るぞ。』

口番の浪人が罵しると、新入の一同は顫え上つた。

『愚にするねえ。此方等ア新入たあ言ひ條、今迄無宿牢で、暴れて通して來た男だ。今日始めて牢内のもつさうを食やアしねえ。……極板つて法があるけえ。』

キビ〳〵した聲で怒鳴つたのが、偶と左膳の耳に入ると、夫がどうやら聞覺えの氣がしてならなかつた。

『コレ喧騒致すは何者だ。尋常に極板を頂戴しろ。』

左膳は聲をかけた。

『名主の旦那、如何に無宿から來たつて、さう安つぽく見て下さへやすな。』

恐れ氣もなく、薄暗い中から、ヌツと顏を突出した。

『オウ貴樣は三吉ではないか。……如何致して之へ參つたのだ。』

『左樣云ふのは、四木の旦那ぢや有りやせんか。』

三吉は圖らざる奇遇に驚いた。



『旦那は未だ此處に居なすつたか。』

『貴樣はどうして此處へ入られたのだ。其樣子ぢや大分前方から來て居るやうだな。』

藍が鼠に汚れ腐つた獄衣と惣髮のやうに延びた月代を見て、左膳は苦笑ひした。

『然し元氣は相變らず慥かなものだ。』

『旦那、俺は彼晩旦那が捕まつた時、一所に御用便になつたんですよ。』

『何貴樣迄か。……夫は合點の行かぬ事だ、貴樣は永井に賴まれて拙者を騙き出した程だから、捕まる筈はないが。』

『處が大違ひなんで。……俺は永井の殿樣に何にも賴まれやしねえんで。』

『夫なら何故拙者に組み附いて來た。……コレ三吉、貴樣は未だに犬になつて、此牢内へ入り込み、拙者の口でも取らうと致すのだらう、不屆者奴。……此牢内は拙者の顎先の動き次第で、虫螻同樣の人間の命、捻り潰すのは何でもないのぢやぞ。』

凄い眼でグツと睨むだ。陰鬱の牢内の空氣は、濕つぽい土氣臭い臭を拔げる。

『冗談ぢや有りやせん、旦那、俺は實の事をいふと、家の御新造に屬魂思召が有りやすん

で、何とかして手に入れたいと思つて居やんしたんで。』

『何だ、友江に貴様が……白痴た奴ぢやな。』

『尋常ぢや鼻も引かけて呉やせんから、此奴は何でも恩を着せるに限ると思つて、つい有頂天になりやしたんで。旦那には合せる顔もねえ始末でムえやす。』

『成程、可笑しな様子に見えた。然らば首尾よく手に入つたか。』

『どうして、其處へ行くどころぢや有りやせん、天で手を出さない中に、下らなく御手當になりやんしたんで。』

三吉の言ふ事が、萬更嘘でないのは、永らく入牢して居たのでも、永井の息が繋つて居ない事が解る。全く友江に思ひをかけ、其甘心を買はん爲に我に背いて敵討の手曳をしたのであらうと、前後の様子を思ひ合せると、疑ひ深い左膳にも、釋然として氷解する處ぬ有つた。

『然らば友江の事は諦めたのか。』

『諦めはしやせんが、彼時旦那の側杖を食つて召捕られ、只の一度の調べもなく打込まれ



ちやつたんで、どうにも法返しが附きやせん。』

『貴様も調べがなかつたのか。』

『旦那もですかい。……此奴は投込んだ切り、牢死を待つんぢやねえですか。』

三吉はヒヤリとして、氣の無い嫌な顏になつた。

『貴様は友江の亭主高野清之助が死んだ事を知つて居るか。』

『いえ少とも。』

『新入から聞いたのだが、高野は人手に懸つて相果たさうだ。すると友江は若い身空で主の無い後家だわい。』

『忌々しいなア。畜生奴。』

三吉は身體を搖つた。

『では友江が手に入る工夫を致して遣さうか。』

『此中に居ちや、釜の中の鮪同様、手も足も出やせん。』

『さう諦めたものでも有るまい。』

『何とか成る工風が有りやしやうか。』

『これ靜かに致せ。壁に耳ぢや。』

牢内の暗い空氣が、口や鼻を押包、まんばかりに塞いで、蟻の呼きさへ聞える程靜かだつた。

## 智慧くらべ

『火事だ〳〵。……オウイ起ろ〳〵。』

牢内は火を見て一齊に騒ぎ立ち、狂ひ上つて格子を掴むで搖り立てる者、破目を碎けんばかりに叩き立てる者、外へ出んと焦る者の意氣で、牢格子は微塵に碎け飛ぶかと思はれた。

吹き附ける黑烟の下から、メラ〳〵と這ひ寄る毒火の舌先は、生きながら炮烙の刑を行ふべく、鋭い熱氣を吐きかけた。

丁度十五夜前のあらぶる天候で有つた。今年は雨風の順を失つて、夏の暑いと言ふ日は



幾日もなく、秋に入つてから、曇り勝で、冷々たる風が、木の葉の裏を眞白に返して吹き荒むだ。

此五六日風ばかり吹くので、八百八町は灰白く乾き切つて居たのに、突然牢屋敷の艮から火を發して、火事と氣が附いた時には、貯所一面の天井裏に火が廻つて居た。

『火事でムります〳〵。』

氣の長い言葉で布令廻る間もなく、火はパツと屋根を燃え拔いて、一條の火炎の柱を空高く吹き上げた。同時に起る阿鼻叫喚、燒け崩れる物音、眞晝の如き輝き、馳せ集まる人々の狼狽へた跫音、沸湯の沸騰するが如き騒ぎの中に、助けてくれ〳〵と絶叫するのは、囚人の忙て騒ぐ聲で有る。

牢役人は必死になつて消し止めやうとしたが、町火消の駈け附けぬ中に、火は一面に擴がつたので、手の下しやうはない、早女牢の格子から火を噴き込むやうになつて、躍り狂ふ囚人の慘狀は目も當られない。風は彌が上にも猛威を逞しうする。

最早之迄と思つた牢役人は、最後の非常手段として、揚屋無宿牢農夫牢を切放すと囚

人は雪崩を打ち、鬨の聲を擧げて、我先にと殺到したが、夫と同時に風に壓伏せられた烟が、重く地を捲いて逆卷立つたので、折角囚牢を逃れながら、烟に捲かれて仆れるも有り、火に包まれて仰反り死すのも有つた。

中には必死になつて役人に力を合せ、火を消し止めやうとする奇特なのも無いではないが、多くは騷ぎに紛れて牢屋敷より逃れ出で、蜘蛛の子を散らすが如く、百八の魔神を走らすに似て、四方八方へ逃げ散つた。火元は傳馬町の牢で、囚人の切り放しが有つたと言ふ噂が、風の如く市中に傳はると、神田日本橋附近の町内では、一度明けた戸を忙てゝ閉て切り、息を殺して靜まり返つた。先年牢屋が燒けた時、切放しの囚人が、到る處に押入つて、狼藉を働いたからで有る。

火は賄所雜使部屋陸尺仲間の溜りを燒き、女牢の大半と揚屋の破目を焦し、向を變へて役所向を八分通燒き拂つて鎭まつたが、揚屋の床下から外へ、人の出入程の穴が明いて居たのを、此時始めて發見した。然し牢屋預りの同心は、事實の儘を屆けると、役目の落度になるので、仲間達の口を封じて、其儘握り潰して了つた。



怎いふ事は有り中の例なので、當時公儀の紀綱といふものが、全く括約の力無くだらけて了つたのが窺れる。

火事の原因は、手過ちともいひ、又放火だとも言はれた。而して外から忍び込んだのを內から力を協せて、大事にしたのだと、根抵を窮めぬ浮說を、夫から夫へと擴げた。

解放した罪人が、九分通歸つて來たと言ふのは、牢役人の吹聽だらうが、實は四分位より歸つては來なかつた。而して逃げた者は、夫なり御手當にならず、歸つた者だけが罪を受けたとなると、結局逃げ德に了つた程、馬鹿〳〵しい御政治向だつた。

四木左膳が解放しから歸らぬのは勿論で有る。無宿牢から假に廻された三吉も、夫なり姿は見せなかつた、恐らく燒死んだ者では有るまい。

此夜一艘の釣舟が、苦を葺いて大川の中流に乘り出して居た。落鰻でも釣る物數寄の遊びのやうに見えたが、中なる客は筋骨逞しき武家と、夫に相對したのは、不思議の大變に囚牢から脫け出た四木左膳で有つた。

忌はしき獄衣は何時しか脫ぎ捨られて、新しき紋服に着替へたけれども、月代は蓬の如

くに伸び、髯は箭のやうに逆立つて、苦しい監禁を語つて居た。

『イヤ首尾よく參つて重疊ぢやつた。』

主なる武士は舟を流れに任せながら、携へた貧乏徳利から、息繼の酒をついで遣つた。

『ヤツ 辱ない。尊公の計略を以て、危うき一命を取止め申した。……時に天下の形勢は如何相成つたな。大凡は牢内にて外ながら風説を致し居つたが、頓と筋道立つた事は解り申さぬ。……彼處は丸で別天地ぢやからな。』

『如何樣御承知ないは御尤もぢや。先何より申したいは、長州表て戰が始まつた事でムるよ。』

『大樹親發といふ事も噂には聞いたが。』

『左樣、隨分と痺れを切らしたやうで有つたが、附景氣に親發と相成つた、其爲幕軍は大分元氣附いて、どうも國表の旗色は宜しくない。夫で福原越後殿始め御家老三人も切腹、其首を幕府へ渡して降參と相成つた趣き、飛札が參つた。』

『何の事ぢや、言甲斐ない國者奴が、戰が始まると降參と一所とは、何たる事ぢやい。』



四木左膳は眼を嗔して舷側を挫げよと握り詰めた。

『誰ケ袖の源兵衞より申參つた處では、之も又餘儀ない次第だて。』

『源兵衞は首尾よく國許へ參つたかな。』

『源兵衞は高野清之助を一發に仕止めたのぢや。』

『オウ源兵衞が自身手を下したか。』

『夫から隨分追はれたらしかつたが、彼の樣に素早い男ぢやから、網の下を潜り潜つて、紀州路から大阪へ出て、船で三田尻へ上つたと言ふ事ぢや。』

『夫で何故降參は餘儀ないと申したかな。』

『夫は恁ぢや、實の處國表では、まだ確と藩論が一定せぬ、中には臆病者も多いに因つて、上下一同が心から一致は致さぬし、豫て我藩と同じ行動を執る筈の薩州が、互ひに手筈が相違して、反つて寄手に加はつたといふ有樣、何事も手順が熟さぬに因つて、一應降參と言ふ事にして、攻口を緩めさせ、彼是する間に、此方が殘らず膳立を整へる、何時お客が來ても、決して狼狽めかぬ。薩州とも打合せが出來たに因つて、島津家は繰出した人

數を引上げたと申す事、國表では高杉晉作が、山縣井上などの暴れ者を選つて、奇兵隊といふのを組立て、幕府の寄手を微塵に碎く趣向が出來上つたといふ事ぢや。』

『君公は如何遊ばされた。』

『萩へ御蟄居は公然、御内々は勿論幕府二百餘年來の天下を覆へす思召し、然し表面は何處までも御謹慎遊ばされた事に相成つて居るから、假令此次の戰に劣けても、罪は高杉其外に於て引受け、君公には累を及ぼさぬやう、事成れば君公を擁立てゝ、幕府の基礎を一氣に覆へす目論見でムるよ。』

『話を聞いただけでも、此血が湧き立つやうぢや。』

左膳は欣然として冷酒を呷つた。久しく酒氣を絶へた腸は、五臟六腑へ順々に滲み渡るのが知れて行く。

『永井信濃の樣子は相分らぬか。』

左膳が當面の敵は永井で有る。彼さへ除けば、雲霞の如き幕軍は、兩眼を奪ひ魂を抜いたも同じだ。



『永井は御勘定方にはあり、禁裡のお覺えもよいので、旁親發の御先供として、將軍家より七日も前に打立つた筈ぢや。』

『然ば高野の家内友江は如何致したか御存じないか。』

『さればぢや、夫が誠に合點參らぬと申すは、永井の立つ二三日置いて、世にも稀な美人が、甲斐々々しい旅裝束で、西へ登つたといふ知らせ、問はず語りの話では有つたが、府中へ出して置いた隱密が歸つての話では、永井の宿と致した府中傳馬町の越後屋傳兵衛、其泊りへ旅の女が尋ねて來て、永井と密談の後、孰れへか去つたと言ふ事、若しか夫が友江では有るまいかな。……高野の家の樣子を搜つた處では、友江は離緣になつて退轉したといふ。尙召使の口吻では、男を拵へて駈落致したのだとも申すが。』

『いや〳〵、減多に男を拵へるやうな女では無い。彼女が江戸に居ず永井も上洛致したとなれば、其間に何か聯絡を附けて考へて見度なる。』

『成る程、深く疑へばぢや。……拙者は友江の顏を見知らぬ爲、直に搜り兼たが殘念ぢやつた。』

『何樣永井は權謀術數に富む恐ろしき人物、友江は男優りの利かぬ氣性、清之助の妻となつたは、一時の若い血に唆のかされたのぢやて。反つて友江が永井と合體致した時は、如何なる芝居を打たうも知れぬ。』

『尊公は友江の爲には親の敵、源兵衛は良人の仇、いづれも不倶戴天物ぢや、之を永井といふ風が煽つたら、今夜の火よりも恐ろしいものにならう。』

恁言つて傳馬町の方を見た時に、火の光は全く消えて、湯氣のやうな白い烟が、繪に描いた夢の末かと棚曳いて居た。

『尊公も婆婆へ出た上は、用心致さねばなるまい。』

『拙者よりも、國許の軍評定の秘密、乃至は兵糧小荷駄の配置、今少し進んでは、萩の御城内の要害、恁いふものゝ洩れるのが大切ぢや。』

『其樣な恐ろしい女かな。』

『何處までも入り込むで、深い秘事の底を割り兼ねまじき女ぢや。』

『よもや國表まで入り込みも致すまい。』



『之より拙者は上へ登るに因つて、途中氣を附けるでムらう。友江は兎に角、永井は油斷ならぬ男、彼奴と智慧競べを致さずばなるまいよ。』

二人が話ながら、流れに任せて漕ぐと、何時しか御臺場近くなつて、其處に繫る親船へ乘附けた。

## 放れ馬

一葉殞ちて天下の秋を知る。長藩の反噬は、二百有餘年の治世に、始めての大龜裂で有つた。而して夫は、今迄腐れに腐れ拔いた内部の疾患が、一時に外部に現はれたので、征夷大將軍の法度に大なる侮辱を加へ、源氏の長者の後光を落し、從來神聖な生神樣と崇めたものも、案外管らないもので有つたやうに、世間に覺らせては、大公儀の威嚴に關するから、如何なる犧牲を拂つても、必ず討滅しなければならぬ、幕府の鼎の輕重は、此一戰で問はれるので、上役人や譜代の意氣込みは、隨分緊張したもので有つたが、肝腎の親兵たる直參の旗下御家人といふ者に、武士といふ自覺が無いのだから、軍容のみは盛んでゐ、

戰の勝敗が今から危ぶまれぬでもなかつた。

總督として征長の全軍を統るのは、紀伊大納言殿。自身出馬の大名には、井伊掃部頭、酒井雅樂頭、阿部主計頭、松平出羽守、小笠原大膳太夫、奥平大膳太夫、立花左近將監、板倉周防守。人數のみ繰出の列侯には松平安藝守、松平阿波守、松平三河守、松平備前守松平相模守、松平美濃守、松平荳前守、有馬中務大輔、松平土佐守、豫備として變に備へべく、豫め人數の手當を整へ置くべく命ぜられたのは、松平加賀守、松平修理太夫、細川越中守、藤堂和泉守、留守預は水戸中納言、松平陸奥守、南部美濃守、佐竹右京太夫松平下總守、松平式部大輔、溝口主膳正で、殆んど天下の精鋭を網羅した。夫と同時に各藩に下されたる御布告は。

松平大膳太夫父子先年以來家政不行屆暴臣共の邪說を信用致し朝命幕議都て蔑如致し候より遂に畏れ多くも禁闕を蹂血し大逆無道に及び候段對京師深く恐入被恩召候就ては速かに可遊御成敗宸襟を奉安度候に付御登阪の上彼地に於て御軍配被爲議候旨被仰出候間御供の面々前先御上洛の振合に不拘行軍の形粧にて被召連候に



付一同格別奮勵身命を抛ち御奉公可仕候事。

恁した布達が飛ばされると共に、大阪に於て定めたる諸手の部署は、石州口討手として阿部主計頭、山岡十兵衛、藝州口討手として、松平安藝守、松平近江守、中軍先手として井伊掃部頭、先鋒總督は紀伊中納言、上の關口討手は、松平隱岐守、松平式部大輔、下の關口討手は、細川越中守、立花飛驒守、小笠原左京太夫、萩口討手は松平修理太夫、有馬中務大輔で、中には人數のみ差出して、自身は國表に殘り臨機の討らひをなすべく命ぜられたのも有つた。

大阪表は鼎の湧くが如く、雲霞の如き大勢が、武者押勇々しく出陣する樣を見た町人は元より、上役人の面々まで、周防長門二國の勢を以て、此大衆に向ふのは、鷄卵を以つて巖に投げ附ける無分別で、一たまもり無く碎け散ると思つた。

公儀の威勢が堂々たるもので有るから、夫に對抗する長州勢も、實に必死の覺悟で、中國探題を以て自任する毛利家上下の興廢は、實に此一戰に在りといふ心が、期せずして若殿輩の心に一致したから、寡勢とは言ひながら、窮鼠猫を噬む死者狂の決心は、石にあら

ねば轉ばし難き大勇猛心を喚起した。

藩侯大膳父子は、表向萩表に蟄居し、蛤御門の當の責任者たる國家老に切腹仰せ附け、謝罪の誠を表はさんとはしたが、國論は國家の存亡を賭けて、五月人形同然の幕軍と血戰し尊王攘夷の實を擧げやうといふ勇ましき主論戰、其外の重役達は、專ら謹愼謝罪の說を取つて居た。然し重役達と雖も心底から幕軍が恐ろしいのではなく、天下の兵を引受けるには、まだ十分の準備が整はない。現に薩摩の修理太夫家とは、西鄕吉之助（隆盛）の手を經て、十分諒解が出來て居る筈だつたのに、反つて討手に加はつて、攻口を預つて居る。夫は薩摩でも國論が合致しないで、勤王と佐幕とが喧み合つて居る爲だから、此處で降參和睦を言ひ入れて置いて、和へたり揉んだりして居る間に、九州の諸大名と打合せ西國一圓の後援を得て、忽ち一戰の下に幕軍を骨廢微塵に打碎き、直ちに五畿內に攻め入つて主上を守護し奉り、天下に號令を下さうといふ深い量見で有つたが、河を馮る暴虎の血氣に焦る若殿輩は反つて因循姑息に思つて、暗殺を行はん有樣だつた。

長州表の此混亂した形勢は、手に取るやうに永井信濃守の許に知れるので、信濃守は



大阪の大本陣に詰め切つて敵の虛に覘け入る方策を描くに、日も亦足らぬ程の多忙を極めて居る。

時の老中井上河內守が切者だといふ噂の有るのは、影に信濃守が有るからで、河內の名で出る政道の仰せ渡しと言ふものは、殆んど信濃守の智慧袋から拈り出された。彼は勘定奉行で有りながら、大目附にもなれば御老中にもなるので有つた。而して彼の手からは、百八の魔王が闇の底より娑婆世界へ飛出す如く、隱密が四方八方に縱たれて、天下の情勢を搜るに怠りなかつた。

萩の城の御奧では、長局の媚めく匂ひの中にも、天下を敵に取つたといふ必死の緊張が有つて、琴三味線のやうな、太平の遊び事は更になかつた。其代御表より然るべき達人を召して、奧方を始め、下々迄、御目見得以上の女中達は、鎗劍薙刀乘馬の技迄修得して居た。

丁度殿が奧方と同列で、馬場の埒に武術の試合を見物して居る時だつた、何に驚いたか一頭の放れ馬が鬣を振亂して馬場の中に飛込んで來た。警護の面々は、驚破事こそあれ

と、各自に馬場を取り圍み、押へて御感に入らうとしたが、弦を放れた矢の止度もなき勢ひは、御厩仲間を蹴仆し、嚙み伏せ、アレヨ〳〵と言ふ間もなく、馬見所の幕張近く躍り込むだ。

八寸に餘る逸物の騮毛は、宛ら火炎の如き光を放ち、切削竹の耳の筍立、爛々たる双眼の輝き、正に生嗟の朝の嵐に嘯く概が有るので、徒士の侍中迄が、右往左往に逃げ廻つた。

此時馬見所の棧敷裏の梯子段を、靜かに降りて來た矢筈絣のお末が有つたが、彼女が降り立つと同時に、馬は馬場から横に反れて、出逢頭の目の前に躍り込んだ。

『浮雲い、退けッ。』

四邊はワイ〳〵と言ふ凄じき人聲、馬は益々狂ひ騰つて、お末が身を躱す暇もなく、棹立になつて擁え込まうとした。

お末とは言ひながら、御目見得以上にも無い蒲柳姿の美人は、あはや馬蹄にかけられたかと、人々が冷りと胸の皷動を止める途段、女は飛上り様に、馬の轡を慥と取つた。元より



ではなかつた。

躍り狂つた馬は、二三度女を振飛ばさうとしたが、眞白な柔かい手が轡から生へたやうに放れないので、流石に狂ひ哮つた馬も、僅かに四足を揃へて立つた儘、湯氣の如き鼻嵐を吹いた。

馬が止つたと見た御厩仲間や、御馬係は忽ちバラ〳〵と飛んで來て、女から馬を請取つた。

今迄手に汗握つた人々は、吻と安心の胸を撫でたが、お末の女の稀代の働きに、驚異の眼を睜づたのは、藩公大膳太夫であつた。

『うい奴ぢや、何と申す女か、目通へ連れい。……頼母しい者ぢや。』

殿の是丈の言葉は、實に無上の激賞で有つた。奥方附の女中達は、嫉まし氣に目を欹立てゝ囁き合ふ。

頃て御錠口番の女中が美人を連れて來た。眉や目のクッキリと鮮かな、鼻梁の通つた女

で有る。大名屋敷のお末奉公などする身體附ではなく、江戸前の粋な黒人で、潰島田に葛引でもかけたら、定めし似合ふだらうと思はれた。

『其方は何と申すか。……只今荒馬を取鎭めた振舞、日頃の嗜みが忍ばれるぞ。』

殿の御機嫌は兵馬の調練よりも、遙かに斜めならず滿足された。

『これは御奥向お末を相勤めまする初と申す端女でムりまする。』

御錠口番は吹聽した。

『女子には稀なる者、賴母しき心掛の者と見受ける。然るべく取立て遣はすがよい。……盃を取らせるであらう。……よい〳〵、取次に及ばぬ、直に〳〵。』

猥りに拜謁ならぬ目見得以下の者に、直々盃を下される事は、目見得以上に登用したのを證明する者で有る。

恁して粹向過ぎるお末は、其夜奥方からも召されて御夜伽を仰付かり、一躍して御小姓に取立てられた。實に異數の出世として、女中達は日頃馬術を心掛なかつたのを殘念がつた。



此お初といふ美人こそは、誰ケ袖の友江が、隱密として長州の奥殿まで入り込むだので永井信濃守直臣の懷刀で有つた。

只のお末でさへ、相手に取つては氣味の惡い烟硝たつたのに、更に御相手の御小姓に取立てたのは、其烟硝を炎々たる火氣の側へ持つて行つたやうなもので有つた。

## 小町長屋

寄ると觸ると姦しい女の習ひは、お末のお初が俄に御小姓に取り立てられた事に就いて羨ましい嫉みを持つた目で見ると共に、異常な出世を、能も辭退もせずに、ヌケ〳〵お請けをしたものだと言つた。殊にお初の出處が明らかで無いのは、若しかしたら身分違ひの穢多非人で有るかも知れぬに、僅の手功から、御小姓に御取立になつたのは、殿樣も餘り御輕々しい事だなどゝ詈しり合つた。

然し友江のお初は、朋輩が蔭言を利くだけ、上のお氣に入つて、奥方にも二無き者に思召されゝば、殿も奥向へ渡らせられる度毎に初々と召されて、酒宴の酌に立せなどした。

元々江戸柳橋の檜舞臺を踏むで、留守居茶屋の娘分で育つて來たので有るから、酒間の周旋なぞにかけては、兎ても外の奥女中が束になつて來ても、太刀打の出來るものでないので、成上り者と妬みながらも下風に立たねばならぬやうになつて了つた。

國司益田福原三家老の首を切つて、公儀へ謝罪するといふ押迫つた場合になつて、若殿輩は重役の因循を怒り、國を賣る奸賊と迄に罵しり、主戰派と溫和派とが、互ひに鎬を削り、血で血を洗ふ内輪揉が始まつた、殿中役人の間でも兩派に分れて睨み合ふやうになると、天誅と唱ふる暗殺が、闇の魔の鐵の爪のやうに、腕の利く人物を此世から攫つて行くのは、兩派に取つて、互ひの大損失で有つた。

萩の城の奥殿に、沈々たる漏斗の音が、冬の夜の寂しさを滲み込ませ、家の棟も三寸下ると言はれる丑の刻で有つた。

殿が奥へ渡られて、睦まじく枕に就かれた時に、二間隔てた宿直の女中も、御殿火鉢の金網に袖をかけて、柔かい溫か味を肌へ通はせながら、いぎたなく眠つた。

廣い御殿の長廊下、處々に金網の行燈が、灯の處だけ明るくなつて、茫つと有明を守つて居る外は、只薄暗がりで、高い天井から何が舞下るも知れぬ程物凄かつた。



何處かで鼠の笑ふ聲が、キチ〳〵と聞えた。

殿の寢間は、奥御殿の押詰つた處で、長廊下からは、間毎〳〵の襖を明けねば、近寄る事はならず、庭の方へは、入側と椽側を經て、始めて繰戸に達するのだつた。

夢とも現とも無く、殿が偶と目覺めた時に、黑檀の書架に置かれた手文庫へ手をかけた怪しい人影が有つた。

女には違ひないが、頭から黑い被衣樣のものを着て居たので、顏は見えなかつた。只其後姿が細そりした痩軀で、どうやら見た事の有るやうな形で有る。

『此奴ッ。』

夢を蹴破つて褥の上に起上つた時、曲者は飛鳥の如く飛退つて、手文庫の蓋を殿へ打附けた。

殿が身を躱して、ハツと逡巡ふ暇に、女は入り側へと飛出した。其處には詰合の不寢番などは居ないのだ。

『コレ出合へ。』

宿直を呼ばれると、詰合の女中は忙てゝ伺候した。遙か離れた室に詰て居た御表の小姓も、變を聞いて追取り刀で駈け附けた。

局々は俄かに犇めき合つて、老女から總出仕を命ぜられた。

殿の寢所へ忍び入る程大膽不敵の曲者は、元より金子などに目が曇たのではなく、手文庫の中の書物が目的だつたから、見咎められると同時に懷へ納めて、幻の如くに消え失せたので有つた。

殿は人の聞えを憚かるから、事を荒立てまいと思つたのだが、奪はれた書物といふのは重役から伺ひを立てた參考書類で夫には薩州との内々の相談、國中兵粮備附の記錄、表はに降服を申出て、内々軍備を修める手段、其外重要な書類なので、殿は大奥へ入られる迄は坐右を放さなかつたので、枕に就く時にも、自ら手文庫へ仕舞はれた程の大切な秘書防長二ケ國の運命は收めて此中に在ると言つてもいゝ。

其大切の書付を奪ふ者が、奥に入り込む以上、味方の大事は筒抜に敵に知れるに違ひな



い。

然し此嚴重の奥向に、外から賊の入るべき筈なく、假令入つたにしても、勝手の知れやう道理はない、殊に夫が女姿で有つたに思ひ合せても、奥女中の中に、敵の間者が紛れ入つたのだらうと、早くも手を廻して、目見得以下の女中を取調べたが、更に疑はしい事がなかつた。

當夜怪しき女姿を、長局の二の側で見たけれども、餘りの恐ろしさに、聲も立てず、隅の方へ俛伏したといふお犬子供が有つたので、二の側の女中に、迂散な者が居るでは有るまいかと、年寄老女の疑ひの眼が光つた。

其二の側といふには、若い御中老や御側の女中達の美しい縹緻の人達ばかりが、偶然部屋を列らねたので、小町長屋と戯れに呼ばれて居た。新規登用のお初も、勿論此二の側に部屋を賜はつたのだ。

曲者の調べは、御奥から御表の手に移つて、老女立合の上、表役人が一々調べて見たが奥向へ立入つては大の男が戰々兢々として、女中の機嫌を損じまいとするので、有効の

調べは出來なかつた。

恁なると、日頃人々の嫉みを受けて居るだけ、俄出世のお初が、迂散な者として、多くの朋輩から、譯も無く疑はれたは是非がない。

夫は外の女中達が、大抵家中の娘で、夫でなくとも、御領分の鄕士などから上つて居るに反し、お初は根が江戸生れで、城下の上總屋平助といふ人入をたよつて來て、假親をして御奉公に上つたのだから、元より素性が慥かとは言はれない。而して當夜は非番で局へ下つて居た。夫で怪しい姿が二の側で消えたとなると、どうもお初が不審で有る。

老女と表役人とは、お初を呼び出して、種々と其夜の事を調べたけれども、騷ぎがあると同時に、お初は外の女中達同樣、出仕姿で御機嫌を伺ひに出たし、お初の部屋を內々に調べたが、殿の手文庫に秘められたといふ書類の切端もなかつた。往復の書狀などにも、怪しいと思ふ節は更になく、其日々々の日記帳にも、格段の御取立を蒙つた難有さが、泌み〴〵身に泌みるやうに書いて有る。どうしても、疑ふべき節もなかつた。

然し局中では、お初が調べられて居ると聞いて、もう曲者は夫に極つたやうに言囃ひした



た。

『マア恐ろしい事ではムいませんか。……お初樣は江戸の間者でムいましたとさ。』

『憎いではムんせんか。……彼樣な蟲も殺さない顏をして、大それた量見でムいます。』

『間者でもしやうといふ女なればこそ、荒馬を止めもしたのでムいましやう。お末から一足飛の御小姓、其御恩も思はずに、憎らしい奴でムいます。屹度所刑にしたがようムいます。』

『夫はモウ磔刑でムいますとも。』

『彼綺麗な自慢の雪の肌を、ヅブ〳〵と槍が縫ふのでムいますね。……オウ厭らしい。』

大勢寄つて恁いふ噂をして居る時、お初は詰所に出て、老女や重役の調べに對して、見事に言ひ開きをした。

『妾は彼晩は常より少し遲く臥りましたが、御非番でムいましたから、書物などを讀みまして、漸く寢入つた處でムいますので、何にも存じませんでしたが、不時の出仕を、御

夜詰から御布令でムいましたから、直に身仕度致しまして、奥方様の御機嫌を伺ひに出ましてムいます。其折に御廊下には、まだ誰方もお見えなさいませんでしたが、別に怪しい影もムいませんでした。』

『其方は跫音も聞かなかつたとお言ひか。』

『いゝへ、二の側通の部屋々々で、非番で籠つておいでの方は、孰れもお起きの御様子でしたから、物音は聞えましたが、長い見通の廊下に、人影はムいませんでした。』

『外に怪しいと思ふ心當りはなかつたへ。』

『森とした眞夜中、更に變つた事はムいません。……誠に口惜しい事を致しました。今一足早く御廊下へ出ましたら、其怪しい者に出逢ひましたかも知れませんのに。』

お初の様子には、心に疚い曇りを持つ風は更に見えない。

『夫ならモウ退りやつてもよいが、此上とも、御上の御身邊を心附まするやう。』

『ハイ、之からは當分御夜詰をさせて戴きます。』

疑ひたいにも、取かゝる疑點が無いので、此上調べを續ける手段もなく、部屋へ退るやうに命じた。



お初が恭々しく色代して、詰所から退らとうする時。

『友江、少時く待ちなさい。』

思ひもかけず、正面の襖を明けて呼び止めた者が有る。

友江とは世に在りし時の慕かしき名では無いか。友江は空耳ではないかと疑つた。遙々江戸を離れて幾百里、誰一人の知己も無い萩の城内で、久しく耳馴ぬ本名を呼ばれた。然も此大切の調べの濟むや濟まぬ時で有つたから、お初の友江は、絶大な強い力で、頭上から打たれた心地がした。

『友江久濶くで有るの。先づ待ちなさい。』

恁言つて、悠々と表役人の側へ着座した男の姿を見るより、友江は流石に顔色を變へて驚いた。

『貴君は四木の旦那さん。』

『オウ、四木左膳だ。……其方は軟弱い女の身として能も大膽に當御城へ入り込み居つた

な。』

左膳は冷笑を口邊に泛べて、友江の顏をジロリと見た。

友江はモウ破滅だと思つたが、夫でも言逃れるだけは逃れねばならぬと考へた。無暗に身を殺すのが忠義でもなければ、大膽でもない。死の最後まで生ん事を思ふのが、信濃守に對する義理ではなからうか。濡つて死を求めて、烈女と言はれても、賴まれた役を十二分に勤め了ふせなければ、死甲斐が無い。

『其方は旨く化たな。』

樣子有り氣の左膳の言葉に、老女も重役も呆氣に取られて、マジ〳〵と二人を瞠めて居た。

## 此怨み

眼前に現はれた親の仇、曾て池の端の蓮見橋で、殆んど敵を討たうとして、見す〳〵取逃した不倶戴天の敵は、悠々と十二分の落着を見せて納まり返つて居る。然も彼は一旦言



開きを立てゝ下らうとする處を呼び止めて、此方に口を開かせまいとするのだらうと思ふと、友江の怒りは火のやうに、柔らかい肉の間に竄入つて搔ばゆく口惜しく、全身を刺戟した。

『防長二國の上下の人の目を欺くとも、俺が持つ此二つの眼は騙られまい。』

『夫は何を仰せ遊ばします。……妾は昔の友江ではムいませぬ。只今は御奥御小姓を勤めまする初でムいます。滅多な事を仰せ遊ばしますな。』

左膳は夫に答へやうともせずに、一座の人々を見廻した。

『方々此女子を取逃してはなりませぬぞ。之は間者として、江戸より遙々下り參つた容易ならぬ女でムるわ。』

形勢不穩と察して居た侍中は、早くも友江を取卷いて、スハと言はゞ押伏せん意氣込みで、小鼻を怒らして居た。

『四木樣、お初殿は江戸の間者でムりますとへ。』

老女は横目にお初を見た。

『如何にも、紛れもなき間者、拙者恐く存じ居る。……拙者は業に此女の爲に、危うく此首を獄門に曝す處でムつたが、折よく牢屋の失火に因つて、辛く命を助かり申した。いや蝮蛇を懐へ容れるやうなものでムるぞ。』

『そんなら御寢所へ入つた曲者は、此女に紛れ有りませぬ。』

折角言ひ開きが立つたものを、思ひも寄らぬ四木が出て此身の讒訴、間者と言ふ事が露はれたかと思ふと、重なる悲憤に、友江の全身は棒の如くに硬直し、滑かな乳房の下は、高浪の如くに顫え動いた。

『四木様、夫は何を仰せでムいます。妾が間者などゝは。』

友江の美しい顔は火のやうに輝いた。命惜しさの卑怯から言逃れる爲ではなく、言逃れねば、信濃守に濟まぬので有る。然し左膳が此處へ現はれた以上、如何に言葉巧みに言廻しても、恐らく遁れる途の無い事を、友江は自覺せぬではなかつた。

『夫ッ、繩を打ちなさい。』

老女の指揮に、手具脛引いて居た若侍は、有無を言はせず押伏せて、高手小手に縛し



めて了つた。花より美しい美人を、殘虐な艱に値はせるのは、嵐に狂ふ花吹雪を面白しと見る慘い心の閃めきで有つた。

友江の縛めの繩は、滑かな肌に食ひ入つて、亂れる黑髪が、ベツトリと白い頰を嘗めても、夫を搔き上げる手は、堅く背に括し上げられて居た。夫でも利かぬ氣の冴えた眸を昂げて、凝と左膳を瞠めながら、

『四木様、貴君には怨みが重なつて居ます。今妾をお縛りでも、屹度此怨みを復して見せますよ。』

『ハハア、引かれ者の小唄と申すものぢや、化の皮が露はれた後に、人を誑かした狐は聞いた事がないわい。』

『何とでもお言ひなさい。……決して安穩には置きませんから。』

友江は沒義道な若侍に繩尻を執られて、不取散暗い座敷牢の中へ押入れられて了つた。

## 寃の罪

老女は直に友江の處分方を伺ひ出た。重役は敵の間者として、見せしめの爲に惨い所刑に行ふと言ふ說で有つた。然し殿の言葉として、友江が當夜の曲者で有つた事と間者で有るといふ事の、確かな證據を得たかと聞かれた。

之には重役も一言の答へが出なかつた。何故ならば、友江のお初の部屋を家探ししても怪しと思ふ品一つもなく、又間者といふ事も、四木左膳が言募るだけで、本人は始めから江戸生れで有るといふ事を言立てたので有るから、今更身分を僞つたといふのでも無い而して間者の證據は微塵も無いから、殿から突止められると、挨拶の言葉に窮して了ふ。

結局は何の咎といふ事も附かずに、長局から離れた物置小舍の一室に閉ぢ込めて、緩々調べる筈で有つたが、今は內輪の小さな事に關係して居る場合で無い程、國の大事が差迫つて居るので、終夫なりに只守りを嚴しくするに過ぎなかつた。

友江は薄暗い牢の中に、日の目も見ずして、濕氣深い陰鬱な空氣に圍まれた儘、殆んど夜とも晝とも分けぬ迄、冷たい薄緣の上に凍て居た。

縛めだけは解かれて居るものゝ、六疊敷ばかりの狹い天地に、明り取さへもなく、黴臭



い匂ひが鼻を衝いた。從來幾人かの人が、此處で責め殺されたと言ふ事も聞いて居る、頓て我身も其運命に殞ちるのだが、何とかして死に度ない。

彼女は殿の居間から奪ひ取つた秘密の書物を、何人にも氣附かれぬ處に隱して有る。之を信濃守の手許へ屆けさへすれば其場で死んでも可いのだが、夫迄はどうでも生き延びねばならぬ。殊に公儀で敵を討つて下さる筈だつた四木左膳が破牢して本國へ歸つて居る以上、願はくは一太刀怨むで、兩親の無念を晴らしたいので有る。何とかして逃げ出したいと言ふ心が、ワク〳〵と胸へ突かけて、焦灼と悶え苦しむだ。然し用心嚴重なる見張の目から逃れる事は、恐らく絕望で有る。

彼等は堅く吩咐けられたものと見えて、食事を運むで來る時にも、一切口を利かなかつた。若し言葉を交したら、乘ぜられる隙を與へはしまいかと思ふ用心であるらしい。

其用心の必要は女から乘せられる男の油斷を恐れたに違ひない。恁思ふと、友江は其處に一道の光明の導きが有るやうな心地がした。

守りの人を騙して、逃れ出る外に工夫は無い。女の武器の色氣深い彩りは、石のやうな

男の心を綿よりも軟らかく、力の無いものにする事が出來はしまいか。

友江は朝夕に代る番人の、孰方に縋つたら、成効し易いかと考へて見た。一人は二十六七の若侍、一人は四十五六の年配だつた、齢を取つた方は、流石に分別も有るらしいが若い方は眼の鮮やかでない、調子に間伸の有る極めて朴訥な漢で有つたから、友江は彼の來る毎に、媚の深い目で迎へたが、彼は木佛金佛のやうに、更に感じがなかつた。恐らく左膳の指金で、恁言ふ男を選むだのであらうと心附いた。

『今日は幾日でムいます。妾は此處へ入れられて、日の目を見ませんから、月日も忘れて了ひました。』

先試みに話しかけて見たけれど、若侍は啞か聾のやうに、更に答へをせず、默々として退ぞき去つて了つた。

友江は情といふものを持たぬ男かと、今更に呆れて了つた。

此二三日は、年配の侍は來なくなつて、朝夕とも若侍が出入する。恐らくは一人の囚人に、二人の武士を附けて置く餘裕の無い程、戰場の駈引が忙がしくなつたのであらう



友江が乘ずべき機會は、實に此時で有る。如何に冷やかな男でも、女が一念で落さうと思へば、落ちぬ事は無いと、一所懸命に氣を揮ひ立てた。

『もし貴君、平生御世話にばかりなりまして、妾は濟まないと心でお詫びをして居ます。……追附け無殘な寃罪の刄にかけられて、妾は淺ましい死樣をするでムいましやう。然し其死ぬ時迄、貴君の御恩は忘れません。』

窈窕たる美人は、雨に惱める艶なる媚めきを湛えて若侍の前に跪まづいた。

今用事を濟して出て行かうとした目の前に、友江の崩れ懸つた大島田が、ガツグリと俛首れて浮み出たので、流石に押退けて出るに忍びなかつた。

『拙者は御身と口を利く事を止められて居るから、話しかけぬやうにして下され。』

當惑するらしかつた。

『夫は御役目の表面、死んで行く者の一言は、御所刑場でもお許しが出ると言ふではムいませんか。……妾の心からの御禮を一言言はせて下さいまし。』

友江のしなやかな身體は、くの字形に斜めに曲げられて、潤ほひの有る眼で、凝と若侍

を見上げた。其美しい顔を避ける事は、若侍が目を閉ぢる外方法はない。

『いや拙者は上役の吩咐けで勤めるばかり、恩も義理もムらぬから、從がつて御身から禮を言はれる道理はムらぬ。』

『貴君は清い美くしい御心、御見上げ申した方でムいます。妾は猶更御禮を言はねば氣が濟みませぬ。若しも貴君様が無慈悲な慘い人でお有りなら、妾は只今より、もつと憂い苦しみを致さねばなりません。……妾は人から怨まれて、恁して無い罪にさいなまれて居るのでムいますから、妾を待つ者は、死神ばかりでムいます。』

『何、御身は寃枉とお言ひやるか。』

若侍は始めて口を開いた。寃罪といふのが案外だつたからだが、思はず口を開いて、飛んだ事をしたといふやうに後悔したらしかつた。

『左様でムいます。妾は人から寃みを受けたのでムいます。御奥では妾が思はぬ出世をしましたのを皆様が快よくお思ひ遊ばしませぬ。其處へ恐ろしい人が、妾を惡者のやうに言ひ振しましたので、無い罪を着せられたのでムいます。』



『夫は御氣の毒な事だ。』

一度禁を破つて口を開いた上は、二度三度と重ねるのを、自から押へる事が出來なかつた。

『拙者は御身が敵の間者で、當國の様子を捜らう爲に紛れ込んだと承知致したが。』

若侍は怪訝さうに友江を見遣つた。

御殿者になつて、濃艶塗るが如き中に、仄のりと江戸生粋の冴えを滲み込ませた美貌は堪へ拔く男の膏汗を搾り出すかと思はれる迄に、好ましい白粉と髪の香とを漂よはせた。

『人といふものは、覺えもない罪咎を着せられて、悶え死する位、口惜しいものはムいません。』

『何人が御身に罪を着せたでムる。』

『夫は妾が居ては、妨たげになると思はれる方でムいます。』

『ハテな。』

若侍は小首をかしげた。

『貴君は四木左膳といふ方の、恐ろしい心を御存じではお有りなさいませんか。』

『四木殿が御身を罪に落したとお言ひ召さるか。』

若侍は實に意外のやうに、ポッカリ厚い唇を擴げた。

『四木様が妾に口を利いては悪いと御吩咐なのでムいましやう。』

若侍は今友江の言葉の眞僞を判斷しつつ有るやうに、默つて考へて居た。

『屹度左様でムいましやう。四木様が江戸で企むで居なすつた恐ろしい罠を、御本國迄持つて入しつたのを能知つて居るのは妾ばかりでムいますから、妾を生かして置くのは、四木様の首へ、年中刄を當て居るやうなものでムいます。……誰でも四木様の企みを御重役へ御訴訟なされば、屹度御立身なされます。』

必死になつて、一生の巧みを言ひ廻す時に、遙かに跫音が聞えて、部屋の外から中を覗き込むだのは、今話し出した當の左膳の嘲けりを嘲んだ目で有つた。

忽ちにして天上に泛び、忽ちにして奈落へ落される友江は、美しき怨みを抱いて、已み〳〵殘酷な責苦の底に突き込まれねばならぬのだ。



肉附きの柔らかい、芳膩な白い肌も、百媚蕩けるばかりの花の顏も、窓しく暗い地獄の穴の底に、日の目も見ずして、弄殺されねばならぬ。

流石の烈女友江も、死を覺悟しながら、どうしても死に度なかつた。彼女には身に餘る程の重い使命が有る。良人清之助を殺した敵、實の兩親を殺された怨み、夫が今日迄其儘に等閑になつて居る。其仇を搜す者は、天下に彼女自身より外ないのだ。更に永井信濃守に托された間者の大役、夫は今日迄隨分役には立つたが、大切の密書を奪ひ取る時に失敗した。夫でも左膳さへ居なかつたら間者たる事を見顯はされるのではなかつたが、無殘な冷酷な彼は、突然友江の前に顯はれて、彼女の素性を告げた。左膳は我身の仇なるのみならず、兩親の敵で有る。從來多少の恩を享けたにせよ、彼に重なる怨みは、享けたものよりは、百千倍して居る。

恁思ふと、友江は此儘生ける墓の底に、誠の死體となつて横たはり度ない。此處を遁れ出づべく啻に一手段のみならず、萬手段を盡しても已むまじく思ひ込んだ。未練とも執着とも言はゞ言へ、どうでも此儘死なぬと思ひ込んだ。

恁いふ心から、彼女は巧みに警護の若侍をそゝのかしかけたのだが、其處へ又しても四木左膳が、苦み走つた食へさうも無い顏を見せたので、ハッと途胸を衝かれた。

左膳は牢格子の外から、冷やかに友江を見て、更に其瞳を若侍に向けて苦笑ひした。

『これ關本氏、到底狐に憑かれ召されたな。此狐は口さへ利いたら、必ず其相手を誑かす金毛九尾の妖狐よりも恐ろしいのだ。氣を附けねばならぬ。』

偖こそ左膳が、豫め口を利かぬやうに吩咐たのだなと思つて、友江は其陰險で周到な注意に驚き、且腹立たしかつた。

『どうだ友江、化狐も檻の中へ入れられては、藁芥を頭へ乘せて、クルリと化る術も出來なからう。笑止千萬だな。』

好い心持に嘲笑つた。彼は己れの手から放れた味方を苦しめるに、十分の懊惱と煩悶とを與へ、然る後に弄り殺しにしたいので有つた。

『然し其方も能く化た者だ、兩國の誰ケ袖の娘から、直參の御家人の家內、夫がグルリと廻ると、公儀重役の御部屋樣か。』



廊下の柱に背を靠せて、仄暗い檻の中を瞰下しつゝ、物を數へるやうに言ひかけたが、友江はジッと唇を嚙むだ儘、口惜しさをジリ附かせて居た。

『其御部屋樣が犬になつて御末奉公、偖々骨の折れる事だ。偶ま荒馬を止めた藝當が御目に止つて首尾よく我君に近づく事が出來た迄は、頓々拍子に運んだらうが、天網恢々疎にして漏さず、折角の處を拙者に見顯はされて　狐は狐相當の檻の中に入れられたわい。……如何に焦つても、もう逃げる事は出來ぬ。往生致すがよい。』

『何とでもお言ひなさい、獅子は百獸の王でも、誤つて罠に落ちたら、鼬鼠や鼠にも愚にされます。ですが愚にされたとて、獅子王の威光が失せたのでは有りませぬ。』

友江は亂れた黑髮を、葱の頭のやうな白い指で搔き上げながら、格子越に左膳に言つた。色が拔ける程白いだけに、薄暗がりに雪の如く仄めき出る美しさが、凄慘の氣を漂はせた。

『其方は流石に氣性の勝つた女ぢやな。此場に莅でも案外强い事を言ふ。然し夫が世に言ふ負惜みと申すものぢやよ。』

『貴君は此妾を、どうなさる思召しでムんす。』
『ハテ拙者にも解らぬ。凡てが其係の者の手心ぢやよ。』
『夫でも貴君は、現に此處に來て、妾を苦しめようとなさるぢやムんせんか。』
『苦しめるのは拙者でも、處刑は拙者の係りでは無い。』
『妾はどうしても殺されるのですか。妾は此方へ來て、何にも不爲な事はしなかつた筈ですのに。』
『未練な事を言ふ女だ。其方は現に御上の御寢間から、御手文庫を盜んだではないか。』
『夫は妾ではムんせん、妾なら何處かに證據が有りさうなものです。』
『證據は其方の胸に仕舞ふて有るわい。』
『妾は流れ〳〵て此御國へ來て、御奥へ御奉公に上つただけ、外に仔細はムんせんに、貴君は妾を間者だとお言ひなさる、而して如此處へ入れなすつたのは、餘り昔の情を忘れたなされ方でムんしやう。』
怨みの眦を回らした嬌艶な身體は、側で見て居る若い闘本の心を、綾なく引摺り込むばかりに妖艶だつた。
『夫だに因つて、人を化す狐だと申すわい。……其方は永井信濃守の寵姫になつて、永井の爲に間者として忍び込んだのでは無いか。』
『妾は永井の御前と、其様な仇嫌らしい仲ではムんせん、只良人が御贔負になりましたから、妾まで御心安く致した丈でムんす。人聞の惡い滅多な事を言つて下さるな。』
『で無くば無いでよい。有ると無いとは、何の差障りも無い事だ。……闘本氏、此女が何を申したか知らぬが、此女の言ふ事は、悉く僞りでムるから、決して騙されてはなりませぬぞ。』
闘本は友江と左膳と、孰れの辭が信實なるやに惑はずに居られなかつた。
「四木様、貴君は妾の親達を殺した上、此儘妾を見殺しになさるお積りですね。』
『オウ、惡の報ひは善では無い。』
『妾が何を惡い事をしました。』
友江は一點の血の氣だも無い、蠟の如くに白い顏を、近々と角格子に押附けて、左膳を

睨み詰めた。

『當家の所刑場と言ふ處は、畫翹さい風が吹いて、夜鬼火が燃ゆる處だ。磔柱もあれば獄門臺も有る。其方の其軟かい肉に、不淨人の錆刀が、ジリ〳〵と食ひ込んで行く時、赤い血が流れ出て、其美しい顏が歪んだり、曲つたりして苦しむのだ。其時に先々御所刑になつた亡者が、其方の髪の毛を取つて闇い穴の底へ引入れて呉るから、安心致すがよい。』

氣味の惡い魔えさうな事を言つて、左膳は呵々と笑つた。

『何とでもお言ひなさい、貴君は妾の兩親を殺した敵だもの。妾まで殺したら、嘸枕が高く寢られる事でムんしやうよ。』

友江は遠く歸り去る左膳の後姿を睨め附けて、石のやうに身を固くした。

## 角格子

『四木樣は全く貴女の御兩親を殺した敵でムるか。』

武士が敵を持つて、其敵を討つといふ事が、寧ろ當時の榮だつた。少なくとも武士道



の驕つた誇だつたから、關本の單純な心には、反つて友江の境遇が羨ましかつた。

『左樣でムんすとも……妾といふ者が居ては、彼人は枕を高く寢られません。敵を側へ置いては、誰でも氣持のいゝものではムんせんから。』

『全く四木樣が手を下したですな。』

『夫が證據には敵呼ばはりをしても、四木樣は言ひ返さないでは有りませんか。』

『全く左樣だ』

關本は口の中で呟いた。

『貴女は何故其敵を討たうとはしなさらない。』

『幾ら討ち度思つても、恁いふ檻へ入れられては、空さへ眺める事が出來ません。妾は敵の爲に、恁して慘らしく殺されるのでムんす。哀れな不運な者と、後で思ひ出したら、一遍の回向を手向けて下さいまし。』

友江はホロリとなつて、軟かい身體を斜めに捩らした。夫が色で媚る積りで無くとも、其姿が自然に千萬無量の媚めきを湛えるから、關本の若い血は、火の如に全身を熱しさせ

た。

『貴女は親の敵を討たなければ、死ぬ事は出來ません。』

『妾はどうして敵を討つ事が出來ましやう。妾の身體が、反つて敵の餌になつて居ますのに。』

『いや、討つ事が出來ぬと諦めたものでは有りませんぞ。』

關本は低い聲に、滿身の熱血を傾け盡して言つた。眼の敏い友江は、早くも此若い武士の鮮かな血の花が、我身の方に向つて開いたなと覺つた。

『何としたら、敵を討つ事が出來ましやう。廣い世の中の多勢の人は、不孝な子として妾を見捨ましたもの。』

『左樣です。世間の人は貴女を捨てたかも知れませぬ。然し只た一人、貴女の爲に、心血を濺がうとする者が有りますぞ。』

關本が恁言つて思はず格子へ寄つた時、美しい友江は中から格子に犇たりとかぢり附いて居た。



『左樣いふ人が有れば、妾は其人の爲に、此身體も此心も、殘らず差上げて了ひます。而して其人の牛とも馬ともなつて、一生を捧げたいと思ひます。』

友江の言葉を聞いて關本は只細かい旋律を、全身に感じるばかりだつた。

『夫は拙者ですぞ。』

『貴君、左樣いふ方が何處に居なさります。お願ひですから、敎へて下さいまし。』

關本の若い血は、思はず熱るばかりに顏を熾いた。

『貴君が。』

友江は感窮まつたやうに、兩手を胸先に組合せ、犇とばかりに我身體を抱きしめつゝ、膝頭で中腰に立つた。

『貴君、哀れな者を、お嬲りでは慘うムんすよ。』

『何で貴女を嬲りますものか。拙者は貴女のやうな、孝心の深い烈女を、見す〳〵殺す事は、武士道に缺ける行ひだと思ひます。』

『貴君が妾を救つて下されば妾は一生恩に着て、貴君の足に踏まれ、手に擲かれても、喜

んで貴君の爲に働き、貴君の思ふ儘に動きたいと存じます。何卒妾を貴君の奉公人とも、飼犬ともして下さいまし。』

友江の言ふ事は、若い關本の血を湧き立たせ、撲ばゆく心を悶えさせるばかりだつた。此敵を狙ふ烈女で、萠え出る花と輝く絶世の美人に、恩人として思はれる事は、人と生れた絶好な面晴ではないか。

空しく下侍として、中國の果に朽ちるよりも、絶世の美人にして烈女たる友江を携へて、遙かに上國へ出で、天晴一人前の侍として世に立つたら、之に上越す滿足は有るまいと思つた。

『拙者は必ず貴女を救つて上げる。』

『此用心の嚴しい中を。……妾一人を救ふ爲に。二人を殺してはロ惜しうムいます。』

『イヤ心配には及びませぬ。此頃中關東の討手を防ぐ爲とて、孰れも國境の口々に出向ひ貴女の事などを關つては居られぬから、容易に御所刑の命令も下りませぬ。其暇に拙者が用意をして、必ず救ひ出して進ぜるから、安心して居なさるがよい。』



『關本樣。』

友江は心の凡てを搾り出したやうな、微妙な顫え聲になつて、縋り附くやうに呼びかけた。

『妾の身體と妾の心とを、何卒貴君の物にして下さいまし。』

『友江殿……拙者は當家を見限りますするぞ。』

『妾は世の中の情と愛といふものを、貴君の爲に始めて知りました。……何と御禮の申し上げやうもムんせん。……今迄の悲しさと淺ましさとを貴君の一言で忘れる事が出來ました。』

濃艶なる絹のやうな頰を、型の附くまでに角格子壓し附け、蕩けるやうな眼の媚めきを一寸づゝに關本の方へ擴げて來た。

若い侍は全く彼女の色の俘虜となり了つた。

## 嵐の夜

左膳が口を利くなと、豫め注意した遠慮は果して此爲で有つた。一度口を利いた以上、世間馴れぬ若い侍が、友江の色香と、巧みな口前とに、忽ち魅せられるは必然で有つた。

左膳は友江を妖狐と罵しつた。彼女は惡い意味の妖狐では無かつたが、百千の媚を啣む花の顏は、妖狐の夫よりも、更に人を迷はすに適して居た。關本は國を捨てる決心に因つて、忠といふ奉公の意義を忘れても、友江の仇討といふ孝心を助けたかつた、夫が武士道の義で有る。義の爲に忠を捨てるのも、又已むを得ぬ事だと考へたのだ。

友江が助からんが爲の萬手段は果して成功した。彼女は遂に關本を掌中に容れる事が出來たのだ。少なくとも八分通は脫出する機會に接近したので有る。

友江は失望の闇黑裡から、希望の光の一脈を認めた。而して一刻も早く、彼の救の手に接する事を、千秋の如くに待ち焦れた。

然し其翌る日から、彼の姿を見る事が出來なくなつた。若しかすると、左膳の爲に疑はれて、警戒を加へられたのではないかと思ふと、折角浮み上つた盲龜の浮木が又徐々と沈



み始めるやうな失望が現はれて來た。

三日といふもの、友江は失望と煩悶とに暮した。四日目の晝から、近年稀なる暴風雨が吹き荒て、只ならぬ樹木の怒り嘯く聲、家の棟も吹飛ぶかと思はれる風の叫び、雨は篠を束ねて叩き附けるやうなのが、楚囚の檻の中へ、手に取るやうに聞える。

彼女は此恐ろしい風雨につけて、遠く懷ひを上國の空に馳せた。其處には亡き良人を引立て吳、而して我身を庇つて吳る恩人の永井信濃守が、長州征伐の御用繁を一身に引受けて、兵粮一式の御勘定を勤めながら、御政道の切盛にも心を苦しめて居る。彼氣品の高い殿樣の身に泌む情、夫は友江に取つて撲ばゆい戀心ではないが、何か無しに慕つかしい氣がしてならなかつた。

彼殿樣の側にさへ居れば、如何なる苦勞も懊惱も忘れる程氣强いのだ。友江は如此事を思ひつゞけながら、京都でも今頃は、恁いふやうに、暴風雨が吹き荒んで居るだらうか。而して自分が殿樣の身の上を思つて居る時に、殿樣も自分の事を考へて居なさるだらうかと、女らしいたわい無い事を思ひながら、自分で其愚々しさを嘲笑つた。何の間柄でも無

いのに、殿様が如其事を思つて下さる筈は無いと打消しなどした。

八刻下りから、雨は幾らか小降になつたらしかつたが、風は決して衰へなかつた。空で唸り哮る聲が、家の棟で魔の叫びとなり、凄じく震動する度毎、ゴト〳〵と床下に異様の響きは、斷へたり續いたりした。夫が風が吹いて來る毎に聞えて、風が一しきり吹き去る間は、靜かに音を立てなかつた。

友江は始め、何かの自然の音だらうと、强ち氣にも止めなかつたが、刻々音が明らかになるに連れ、夫が鋸の音で正しく人間の成す業たと心附いた。

時は慥かに暮六を過ぎたらしいのは、平常の通り、夕食を連んで來てから、稍時が過ぎたので占はれる。

何の爲に床下に鋸の音が有るだらうか、夫が我身の爲に利か否かと考へて見た。

左膳が友江を暗殺する必要は、今絶對にないのだから、彼等一卷の仕業で無いとすると我身を救ふ爲の破牢では有るまいか。若し夫としたら、闘本でなければならぬ、彼は一刻も早く機會を狙つてと言つた、其機會は今際どい瀬戸に逢著して、天は彼女の爲に恐ろし



き風雨を、好運として送つて居た。

友江は音する方とは反對の隅に、犇り身を寄せ附けて、事の成行きを瞶めながら滑かな肌に浪打たし、咽喉を渇かして唾を呑むで居た。

暴風雨のすさぶと共に、音は益々間近になつた。もう其處に何者かゞ現はれねばならぬのだ。友江は瞬きだもしなかつた。

果然、隅の方の床板はモク〳〵と扛上つた。其處から頬冠りした若い侍の頭が突き出た。

『友江殿、今夜の暴風雨は、天の賜物ですぞ。』

案の定彼の聲で有つた。友江は今更に心が餒えるやうに感じた。

『闘本様、來て下さいましたか。』

友江は駈け寄るやうにして、若い侍の手を握つた。風雨に凍て居る筈の彼の手は、熱して火よりも熱かつた。

『漸く床下を破り申した。外には仕度が出來てムる。』

闘本が堅く握り返した時に、其手に感激の顫えが有るのを感じた。若い血は躍つて居るのだ。

『出られますでしやうか。』

『無論出ねばなりませぬ。』

『恐ろしい暴風雨に、能御約束を守つて入らしつて下さいました。』

『暴風雨で無ければ來る事は出來ませぬ。拙者は此事に就いて、手傳の人を捜す爲、三日といふもの駈け回りました。』

彼が三日見えなかつたのは、所勞を言ひ立てゝ、此準備に忙殺されて居たのだ。

此樣な親切な若い男を騙すのは、罪な業だと、友江はツク〳〵悲しくなつた。左膳が金毛九尾の妖狐だと言つたのは決して誣た言葉ではない。我身は全く惡魔となつたのだと思つた。然し其惡魔となるも、亡き良人の主君の爲、恩ある人の爲なれば、惡魔が夜叉でも是非がないと、忙たゞしい中に、心の中で辯疏して見た。

『闘本樣、妾は貴君に縋り附く外、頼みにする人はムんせん。……嬉しうムんす。』



と身を顫はした。

『早う仕度をなされるがよい。』

『妾は仕度と言ふものは有りませぬ、直に此儘。』

『夫なら拙者に跟いて、此床下に潜り込んで來なされ。』

言はれる儘に床へ這入つた時に、御殿の事で有るから案外床下が高かつたので、行動は思ひの外自由だつた。

饅頭笠や桐油合羽の支度が、其處に置かれて有つた。友江が漸く闇の中から闇の中へと拔け出した時、絶世の美人は無くて、篠突の雨の中に、中間姿の二人が立つて居た。只一人の足は雪のやうに白かつたが、風雨の闇中には人の目が屆かないのが仕合せだ。

案内知つた闘本は、惡びれたり、怯れたりした樣もなく、非常の夜を警むる、拍子木を打鳴らし、大膽に提灯で途を照して歩いて來た。

雨に洗はれた往來は、鑢で磨いたやうな石の先が、針の山のやうに植ゑられて居た。而して處々に、幅の廣い川や、溝が道を覆ふて漫々として居たり、板の剝がれたのや、木の

枝の折れたのが散亂して居た。成る程提灯が無ければ、一歩たりとも無事に歩けるものでは無い。

二人の姿は頓て城内長の土手上へと顯はれた。此時には何時の間にか提灯の火は消されて居た。然し闇に馴らされた二人には、割合に自他を見分ける事が出來た。

土手には千年の風雨に黝ずむ松の大木が、巨人の怒るが如く、凄じき形相を以て、風伯雨師を叱し退けんとして、枝と枝と相搏ち、狂ひ立つて怒號して居た。風の吹き荒ぶ毎に二人は危うく吹き仆されん斗りだ。

崖から下を見ると、漫々たる濠の水は、盛上るばかりに腫れて、堀端の往來に氾濫したらしく、闇の中に鼠色に光つて居た。

一筋の縄梯子が松の根方から、石崖を越えて、濠の中に垂れかけて有るのが、風の爲に幾度も飜へり、吹き捲くられるらしい。

『オーイ。』

四方を慄かる聲が、水の上に聲えた。闘本は直に石を以て石崖を敲いた。夫は始めから



約束された合圖らしかつた。

彼が手傳を捜すに三日を要したといふのは、其處に舟を以て迎へる人を作る爲だつたといふ事を、始めて友江に點頭かせた。

『此縄梯子を下りなければなりませんぞ。』

闘本は友江の耳の根に囁いた。

『ハイ、屹度下りて見ます。』

と言つたが、軟弱き女が、暴風の中の縄梯子を、幾丈の長さに傳はる事は、至難中の至難だつた。

細い手に縄を執つて、嬌やかな足をかけやうとすると、梯子は風に掀飜されて、空中遙かに吹き上つた。宛がら鞦韆が上手に漕がれて、勢ひが彈むだと異る處がない。

『オイ、梯子を押へろ。』

小さな聲で言つて見たが、兎ても風で聞える事ではなかつた。

『之は不可。』

闘本は呟いた。

『拙者の背へ負ぶさりなさるがよい。見榮を言ふ時ではムらぬ。』

『何で見榮も外聞も有りましやう。』

濡れた身體の上へ、濡れた身體が覆ひになつた。雨合羽といふものが無ければ、友江の溫かみが闘本の身體に感じたか知れぬが、硬々した合羽の隔てが、更に軟らかさを覺えぬのみか、目も眩むばかりの石崖の上で、追手を恐れながら、風雨と闘ふのだから、今は戀も愛もなく、只無事に下るべき一心ばかりだ。

友江の身體は、紐を以て闘本の背に十字に括られた。用意は全くなつた。

目も遙かな下は、狂瀾怒濤が起ると見えて、白い浪が逆卷いて居る、虚空は非常な速力で、風が怒りつゝ走り、雨が唸りつゝ打ち附けられて居るのだ。

夫でも彼は必死になつて、縄梯子を下り始めた。背に縋る友江は、堅く目を閉ぢ、心の中に神佛を祈念しつゝ、運を天に任して居た。一度足を踏み外すか、縄が切れるかすれば魔の淵の主となるより外の運命は齎らさない。



然し闘本は徐々として下り始めた。危うく石崖に蔽き附けられやうとするのを、巧みに岩角を押へながら、見る〳〵二間ばかり下りて來た、丁度縄梯子の中途より、稍下へ降つて來ると、重心が下へ重くかゝつたので、强風に煽られて、縄梯子の飜へりつゝ捩れるのが見えた。二人の危うき事は言ふ迄もない。

水上の小船は、搖り上げ搖り下されながら、辛くも縄梯子の端を捉へる事が出來た。之が凡ての運命に解決を與へた。梯子は斜めに一直線に緊張され、船の搖上げられるのも靜まつた。

『大丈夫だ。緩くり氣を落ち附けなさい。』

下から聲援を與へたのは、闘本の耳へは入らなかつた。夫でも辛うじて小船まで乘移る事が出來て、ホツと甦へるばかりだつた。

『占めたぞ、夫漕げ。』

二人の舟子も、屈竟の男達で有る。要害の嚴しい城の濠を、暴風雨の中に艪を押し切つて忽ち暗中に見えずなつた。

空は依然として濃黑に重なり合ひ、雨脚は稍輕くなつたが、風は一入烈しかつた。而して異樣の光物が、天の一方で物凄く飛んだ。

## 一心同體

三日の間の所勞は、關本に取つて、實に畢生の奔走だつた。彼は舟子を語らひ得たのみならず、一時の落附き先をさへ拵へたのだ。而して暴風雨を幸ひに、床板を切つて、座敷牢へ忍び込んだので有る。此恐ろしき風雨は、二人が身を遁れるには、全く天幸だつた、先刻から今迄の行動を、彼等四人と、天と地との外は、全く關知する者がなかつた。

恁して首尾よく隱家へ着いた時、語らはれた舟子の一人は、合羽を脫ぐ友江の顏を見て飛び上らんばかりに驚いた。

『御新造さんぢやムへやせんか。』

『オヤ、汝は三吉ぢや無いかへ。』

友江も夢の中を引摺られ行く心地がした。我身が間者として入つた時に、三吉も長州へ



入り込んで居たのだ。

『御新造さん、御無事で結構でムへやした。』

三吉は實際奇遇と、友江の恙なかつたのとを、心から喜んだ。

『俺は關本の旦那に賴まれたけれど、今が今迄御新造さんとは知らなかつた。』

『關本さんは、妾を救つて下すつた大恩人で入らつしやるから、能御禮を申しておくれよ。』

『左樣ですか。旦那、俺は御新造の家來で三吉と言ふ端下者ですが、御新造を陰ながら守つて居る積りでも、少とも行屆かずに旦那の御世話になつて了ひました。』

『然らば其方は友江殿の家來、主の御供致して、共々敵を尋ねるのぢやな。』

『左樣なのでムんすよ。三吉は忠義者で、能勤めてくれます。何處々々迄も敵討の供をすると申して吳まして。』

口が違ふと不可ないと思つて、友江は直に引取つて言つた。

『偖々主從ながら、誠に恐入つた者だ。拙者武士で有りながら面目なく思ふ。』

『あれ勿體ない貴君の御蔭で、妾達が生きられたのではムんせんか。』

『全く旦那は命の親だ。』

三吉は側から跪を合した。

『關本様、之から妾達はどう致したものでムいましやう、一刻も早く御國から出たいと思ひます。』

『此頃は戰が始まつたに因つて、容易な事では領分境を通行致させぬから、拙者は二枚分の通り手形を貰つて置いた、之は貴女に御預け致さう。……拙者は今一度城内へ引返して、貴女に代つて左膳殿を討果して、再度此處へ逃げて參らうと思ふ。親の敵を人に討たれては心外か知らぬが、拙者は貴女方二人の心懸に勵まされて、彼奴に天誅の刃を加へ遣はすのが、武士たる勤めかと存ずる。』

『妾の身體と貴君の身體とは、一心同體になる筈でしたから、貴君が妾に代つて、彼人を討つて下さるのは、此上もない嬉しい事でムんすけれど、貴君に過ちが有つた時、妾は此先寂しい闇を歩かなければなりません。』



悲し氣な顏を曇らした。

『いや決して。……今逃げた事を未だ城内では知りませぬから、拙者は船を乘り戻して、再び石崖を登り、繩梯子は水の中へ切捨て申す、怎樣致して、何處までも知らぬ振をして四木氏を討取り再度之へ參りまする、夫迄隱れて居なさるがいゝ、決して長い間ではムらぬ。今夜でなうても、明日の晩までに。』

『夫なら妾の無事の印に、貴君が又來て下さる迄は、夜は目印に燈を點け、晝は窓を半分明けて置きまする。』

『オウ、夫で拙者も安心でムる。……四木氏は貴女の敵のみではない、不忠不義の惡人、彼を殺すのは、せめてもの拙者の忠節でムるわい。』

『全く左樣に違へねへ。……流石に旦那は御武家だ。見上げたものだ。』

三吉は大凡を察して、關本を煽て上げた。關本は三吉を殘して置いて、彡の一人の舟子を促し立て、再び舟へ乘つて、高浪を乘つ切りつゝ以前の繩梯子へ取附いた。

下ると違つて、一人身では有るし、登るので有るから、案外すら〳〵と城壁に立つ事が

出來た。

振返つて見ると、城外遙かに、遠く一點の火光が、闇の中に星の如く燦めく、夫は約束の如く友江が目標にと言つた、優しい心の象徴とも見るべきでは無いか。關本は懷かし氣に、其火影に見入つて、少時恍惚として居たが、頓て土手を下つて一人住む小舍へと歸り、始めて心を落ち附けた。

今若い侍の心にあるものは、忠でも義でもなく、只芳膩濃やかなる友江の美しい俤であつた。

彼は全く友江に魅せられ、友江に其心を支配されて了つた。彼が左膳を暗殺せんとするのは、義の忿激といふよりも、彼女の歡心を買ふが爲に外ならない。若き血は終に白面膩紛の妖狐の媚術に吸ひ取られ、魅入られて了つたのだ。

## 妖狐

心の固まらぬ若い侍は、友江の軟かい滑かな媚に唆のかされ、親の敵といふ道理有る



言葉に惹寄せられて、四木左膳を、極惡無道の奸物と思ひ込んで了つたのだ。

實際四木左膳は善人では無かつたが、關本が信じた程の惡人ではない、殘虐な慘い血が彼の脈管を彩つたが、其血は己れの爲に濺ぐのではなく、其主人たる大膳太夫、延いては大君の爲にする忠ともなつたのだ。然し腦が單純で、思ひ込んだら只一筋にのみ走る彼は、左膳を大惡人とも謀叛人とも思つたのだ。

恁いふ危險が待設けられゝばこそ、左膳が關本に口を利くのを禁じたので、世智馴れぬ彼が嬋娟な友江と一語を交したならば忽ち芳膩たる香しき色香に裹まれ、白粉の中に抱擁されて、心神忽ち飴と蕩けるだらうと思つたのだ。

彼の心配は不幸にして適中した。天佑とも言ふべき風雨の危險を犯して、若い侍の盲目的に熱狂した努力は、終に彼女を偷み出させたのみならず、更に彼女に代つて、左膳を刺さんとする迄に到つたのだ、優しい女の力は磐石よりも重く强い事を證明するもので有る。

關本は友江のお初を川向ふの家に預けた儘再び引返して、何食はぬ顏に、元の位置へと

歸つて來た。

何分にも幕軍が四方から國境を壓して居るのに、味方は和戰兩黨の異論百出の有樣だから宛ら鼎の煮え爛れるやうで、一人半分の女間者を注意して居る遑がなかつた。從つて昨夜彼女が逃げ去つた事は、左膳の耳に入らないのだ。

左膳が君公に拜謁して、何か緊急の用向を言上した後に、我詰所へ下つて來たのは、朝五刻半頃で有つた。

彼が今や詰所へ入らんとする時、顏色を眞蒼にして、鋭い眼の光を輝かして居る關本が人待顏に佇むのを見た。

『オウ半六、用事でも有るかな。彼女は如何致した。別條は有るまいな。』

左膳は更に警戒する風もなく、全然油斷するらしかつた。否氣を許して居ねばならぬ筈だ。

『四木殿、手前は少々伺ひたい事がムりますが。』

彼は燃ゆる血の閃めきに激せられながら、强て心を落附けて言つた。



『何ぢやい、改まつて。』

『いや眞劍でムりまする。』

『誰も冗談とは申さぬでないか。』

左膳は此時始めて關本の樣子に心附いた。若い侍は只ならぬ血色で有る。

『四木殿、御貴殿は彼お初殿の親御を殺された想にムりますな。』

突然の問に、四木は少し蹴躓づいたやうに躊躇した。

『半六、其方は友江に騙され居つたな。』

『いや騙されませぬ。憚りながら御貴殿こそ、お初殿をお騙しなされた。』

思ひ詰めて居る半六の眼には、險惡な色が血走つた。

『左樣いふのが騙された證據ぢやで。其方は拙者の吩咐を破つて、彼女と口を利いたのぢやな。彼女は妖狐ぢや、側へ寄る者は凡て誑かさねば措かぬわい。』

『いや、左樣言はれるは卑怯でムりませぬか、武士として恥べき事ではムりませぬか。御貴殿はお初殿の色香を愛でゝ、無理な事をされやうとなされた。』

『默らつしやい。』

左膳は鋭く睨み据ゑて一喝した。

『彼女の色香に迷ふたは其方ぢや。……其方は拙者に何用有つて參つたのぢや。』

『お初殿に代つて、武士の風上にも置けぬ卑怯な惡人を除く爲でムる。』

『何と申す。』

ハツと思つた左膳が身構へやうとした時、闘本は餓ゑたる獅子の如くに躍り蒐つて、矢庭に左膳の眞向に斬附けた。

然し左膳は弱い小羊では無く、寧ろ獅子を裂いて餌とする狐で有つた。刄の閃めきと共に身を躱したので、刀は斜に流れて僅かに肩口を掠めた。

『無禮者ッ、退れッ。』

流るゝ血を事ともせずに、左膳は威丈高に、叱り附けた。

『卑怯でムる。』

闘本は戰なく息を彈ませて、二の太刀打たんと一足踏み出したが、爛々たる左膳の眼光



に射られて、其儘立竦んだ。

『方々出會ひ召され。半六亂心でムる。』

左膳の呼ぶ聲を聞くより先に、只ならぬ物音に驚いた詰合の諸士は、忽ち闘本の後より無手と組み附いた。

『放せッ。』

闘本は振もぎつて前へ進まうとしたが、見る〳〵多勢に折重なられて、跳反す力も無く齒噛をしつゝ生擒られた。

『愚者奴、敵の間者に欺かれて、身を滅ぼすのぢや。飛んで火に入る夏の蟲のやうな奴ぢや。……彼女は今頃舌を出して笑つて居るぞ。』

左膳は冷やかな笑ひを、反りかへした口邊に泛べた。

『驕て彼女と共に、死罪に致し遣はすぞ。其方も滿足であらうわい。』

『お初殿は疾の昔に此處には居りません。』

凄慘の氣に充ちた闘本は、嘲るやうに左膳を見返した。

『其方は、彼女を逃がしたな。重々許し難き奴ぢや。』

『お初殿のやうな孝女は、天が護つて下さりますぞ。』

『愚者奴、其方は踏臺にされたのぢや。』

恁して彼は城の一角なる櫓の中に閉ぢ込められて了つた。

其處からは漫々たる水を隔てゝ、友江を匿まつて置いた水滸の孤家が見える。晝は障子を半開になし、夜は燈を點けて關本の歸る目標として有る筈だ。

若い侍は擒となつて押籠められながら、尙一家の障子の開けられん事を祈つた。然し障子を明ける代りに戸が閉てられ、夜の燈の代りに重くろしい漆のやうな闇が擴がつて居た。曾て一點の螢火だもない。

彼は始めて左膳の言葉を考へ始めるやうになつた。友江の甘言は、身を逃れる爲の口實で有たらうか、美しい女は妖狐の化した者だといふ事を、儒者から聞いた事が有るが、左膳の言ふが如く、蜜のやうな言葉と、軟かく溫かい手で、自分は誑かされたので有つたかも知れぬと迷ひ始めた。而して此不可解の迷宮に彷徨ひつゝ、三寶に載せられた腹切刀に



手をかけねばならなかつた。

## 八百長崩

德川二百有餘年の天下は、燦爛たる黃金の光に輝やき、珠玉の耀きに彩られ、千秋萬歲を壽ぎ祝つたのが、黑船の入朝が長夜の夢を破り、續いて櫻田の血染の雪となり、阪下の劍の稻妻となつて、龜裂が入つて來たので、尊王攘夷の聲は、潮の湧くが如く、轟々たる風雨の襲來を豫報したのだが、安きに狎れて醉生夢死する江戸の上下は、危機の頭上に臨むも覺らなかつた。

餘りに天下の力を過信するので、將軍親發の飛報も只一時の雨風で、軈ては事も無く晴れるものと、誰一人念頭に止むる者無き程、暢氣に考へて居た。

第一回の長州征伐は、尾張大納言慶勝朝臣を總督とし、薩肥藝筑以下三十一藩の兵を選つて、大旆を廣島に進め、四道より長州を攻め討たんとしたので、此時には長州の國論が二つに分れて居たのと、十分の戰備が整のはなかつたので、家老福原益田國司の三人が、

京都暴動の責を負ひて自殺し、其首級を差出して罪を謝したので、總督府からは、第一山口城を毀却する事、第二三條大納言以下の七卿を逐ふ事、第三藩主父子自ら軍門に來つて罪を謝する事、第四不逞激論黨を壓して再び騷擾を起さぬ事といふ案件を出して、其降服を許したので、慶應元年の正月に、一先征長の師を班す事になつた。

然るに幕軍が引揚げると同時に、東行高杉晋作が、藩主降服に不服な激論黨五百名を翕合して奇兵隊と稱し、下關に義憤の旗を上げた。

始めは僅かに五百人に過ぎなかつたが、兵を行る事風の如き高杉は、倏忽として反對黨の巨魁を殪し、藩主を擁して號令したので、長防二國は敢然として起ち、大公儀を正面の敵として戰ふに至つた。

幕府では直ちに再度の長州征伐を天下に令し、紀州中納言茂承朝臣を總督として、大兵を動かすべく、將軍家茂卿は五月二十二日を以て、京都に入朝した。

之ぞ幕府の大權を奈落の底に拋つたので、再度の征長には、九州の重鎭たる薩州は一兵をも出さぬのみならず、西鄕吉之助（隆盛）を密使として、長州と一種の同盟を結んだ程だつたから、幕府から出した最後の嚴命たる長藩の封十萬石を削り、藩主父子を押込め、三國老の一家を刑する嚴命などは、更に顧みられずして、此處に戰端が開けた。



攻擊軍たる幕軍も能く戰つたが、長兵は極めて身輕で、關東勢の甲冑扮裝の比ではないから、六月二日から七月八日迄の各處の戰爭に、寄手は名有る將士を失ひ、兵粮を奪はれ次第々々に引色になつた。

此間永井信濃守が、空乏なる財政を繰廻して、莫大な軍資を送つて居た事は、三軍を指揮する以上の難事で有つた。況して內外の政務迄自然に轉がり込んで來るので、其忙がしさは目に灼鐵を當られるばかりだつた。

其中に將軍家が脚氣衝心の急症で、敢なく大阪城で薨去したのは七月の十一日で有つた。

同じ年の十一月に一橋慶喜が征夷大將軍に任ぜられると、其十二月には、主上崩御あらせられ、天下諒闇の寂しみに暮れ行く空は、どんよりと重い雪模樣に濁らせられた。

一度長州征伐の大軍を引上げて、幕府の威信地を拂ふと、國守大名の大藩は、更に上役

人の命を聞かず、勤王の浪士は處在に蜂起し、外交の事が繁くなつたので、幕府は最早大權を保つ事が出來なくなつた。

土州の名士後藤象次郎は、藩主の使者として、大政奉還を將軍家に勸めたので、最早大勢動かす可らずと觀じた將軍家は　表を上つて節刀を還し奉らん事を願つたので、十二月九日を以て王政の復古を見るに至つたのだ。

征夷大將軍が兵馬の大權を返し奉れば、平大名と同列に下つて了ふ。其時には、多年隱忍して居た外樣の大名が、矛を倒にして窮地に陷入れんとするは明らかで有る。恁して神祖以來の葵の紋所は、馬蹄に踏み躪られて、社稷の祀も絕やさねばならず。さしも時めきし江戸城にも住み兼ねば、江戸百萬の老幼男女を、亡國塗炭の苦しみに埋めねばならぬから、大政奉還は一度江戸へ引上げてからでも遲くは無いといふのが、信濃守の意見で有つたが、老中若年寄を始め、重き上役人の凡てが、黑白を辨へぬ鈍物ばかりだから、唯一人耳を假さうとする者も無く葬り去られて了つた。

信濃守は頭上に覆かゝる險惡な、而して必然の運命から、如何にして無智の直參を免れ



しめ、災害を少なくする事が出來やうかと、只一人肝膽を碎く時、茶臼山の矯居に、圖らずも尋ねて來たのは、可惜花の盛りの香魂を、敵地に湮めたとのみ思つて居た友江だつたので、信濃守は狂喜せんばかりだつた。

『オウ友江殿、能無事に戻られたな。拙者は昨年來亂軍の中では有つたし、危うい橋を渡られたから、迚ても生きては返るまいと、實は心ばかりの香の手向を致し居つた處ぢや。……恙ない姿を見て、拾ひ物致した心地がしますぞ。』

心からの滿足に輝く信濃守の後には　一縷の香が篆字の烟を仄めかしつゝ、幽意しめやかに薰じた。床にかけた楊柳觀世音の氣高き慈悲の顏は、義と情に人を惹附ける信濃守の溫容に似るやうに見えた。

友江は此一言を聞くと、心から蕩けるばかりに、辱なさが滲み込んだ。長年の艱難辛苦も、此優しい一言に拭ひ去られて、心神俄かに甦生る心地がして、此人の爲に死に、此人の手づから回向して貰ひたかつた。

『定めし艱難を致した事であらう。溢れかゝる花のやうに美しかつた俤は、案外窶れは

せぬが、何處ともなく衰へも見えるやうぢや。先緩々と寛ろがれるが宜しい。』

信濃守は親身の妹にでも逢つたやうな心地がする。友江は又、兄とも親とも寧ろ夫以上の親しみを持つ何者かの懷へ戻つたやうな慕かしみが湧いて來た。

友江は長州へ入つて、山口城のお末奉公から、荒馬の不時の手功に會つて、奥女中に引上げられたのが、殿の寢室の手函を奪ひ損ねた上に、四木左膳に見顯はされ、囚牢の中に捉はれたのを、牢番の若い侍を騙して、首尾よく逃げ出し、三吉と共に石州を山陰道へ出で、兎も角命だけは、覺束なくも取止めて、大阪に入つた一伍一什を述べた。

『上へ對する忠節只感じ入るの外はない、折を見て言上致すでムらうが、夫につけても、其許の殊勝な働きを、死んだ清之助殿が聞かれたら、如何ばかり喜ばれる事であらう。』

突然亡き良人の名を言はれて、友江は羞恥いやうな媚かしき極り惡さが、溫かく軟らかき肉の中に滲み出た。而して亡き人に對する心が、何處となく面目ない心地がしてならなかつた。

實際友江は死んだ良人の主人たる、大公儀の爲に忠節を盡し、良人の志を繼ぐといふ



よりも、今では永井信濃守の爲に、一身を揉み碎くので有つたからだ。

『妾よりも殿樣こそ、並大抵の御苦勞では入つしやいません。夫を考へますと、妾のやうな者はまだ此上にも、如何程苦勞を致しても宜しいのでムいます。』

『今公儀の旗下衆の中で、其許程の殊勝な心の者が、百人二百人あれば、大政奉還に及ばすとも、まだ御上の天下は續いただのが、殘念千萬ぢや。』

『承まはりますと、御上では將軍家の御役をお取止め遊ばされましたとか。而ムいますと之から世の中は、どうなるのでムいましやう。』

瑠璃に輝やく澤々した眼を睜ると、凄婉の氣が爽やかに冴えた。埃に塗れても丈なす黑髮の艶々しき、塵に汚れても溫かき雪の如く軟らかき秀美の肌、滑らかな芳脆の皮膚が、信濃守の疲れた心を軟らかく撫でさする心地がした。

『實を云へば、一寸先は闇といふ外はない。大方田舍侍が、花の御江戸を土足に踏み躙り町方の町人職人迄が、新吾左の犬猫同然に扱かはれるではないか。』

『夫では薩州長州土州其外浪人方の頭立つた人の黑いお腹の中を、モウ御存じ遊ばします

か。』

友江は我知らず膝を進めた。

『大方は知つては居るが、取止めた委しい話しはまだ耳に入り申さぬ。其許は途中何ぞ聞き込んだ事がムるかな。』

『ハイ、妾は直接に御當地へ參られませぬから、姑らく大阪の外を廻つて、京都に隱れて居りました。燈臺元暗しの譬へもムいますから。』

『オウ能京都迄お登りなされたな。』

『ハイ、夫はモウ一所懸命でムいます。而して若しかしたら、二條の御城に殿樣がお詰め遊ばすかと存じて。』

『京都は定めし各藩の兵隊で賑はしい事でムらう。』

『ハイ、京都には浪人衆やら、中國筋から九州の御大名の兵隊やらが、洛中洛外の御寺に盛り溢れるばかり、會津桑名の禁裡守護の殿樣方は、もう隅の方へ押すくめられて、影も見えない程でムいます。町方では戰が始まると申して、戸締をして、近在の親戚へ逃げて



行きましたから、丸で火の消えたやうでムいました。』

『大方左樣なる事とは存したが、餘りと云へば有爲轉變の有樣だな。』

信濃守は匙を投げたやうに言つた。

『而して妾は、恐ろしい話を聞いて參りましたから、夫を殿樣に申上げたいのでムいます。』

友江が鮮かな眉を動かすと、信濃守は輕い不安を曇らした。

『アノお上では、御上洛遊ばすのでムいますか。』

『まだ日日はお定めに相成らぬが、一度御上洛に相成つて、御謹愼の外他意無い由を言上遊ばされるであらうと存ずる。……夫が如何致したか。』

『夫こそ大變でムいます。妾は京都で先斗町と申す所の仲居を致して、忍んで居りましたが、其御茶屋へ落合まするのが、長州の桂小五郎（木戸孝允）薩州の西鄕吉之助、大山彌助（巖）などゝいふ人達で、其相談を聞きますと、何でも御上が御上洛になれば、伏見鳥羽の兩街道を立切り一足も京都へ入れないやうにすると、其處でどうしても戰が始まるに

極つて居るから、鐵砲の音が一つでもしたら、直に朝敵として、是が非でも征伐するといふ相談でムいます。而するより外德川家取潰しの手早い道は無いと言つて居ましたから、若し御上洛になれば、夫こそ大變でムいましやう。』

『大方其位の惡法は企てやうと存じ申した。して京都には、凡そどの位の兵隊が居るか、見切は附かなんだかな。』

『ハイ、町中何處へ行つても、中國訛や九州言葉でムいますから、大層多いやうには思はれますが、千人とは如何でムいましやうか。……彼人達の內談では、此方から攻て行くのは、人數が足りないから、向ふから來るのを、難所で防ぐと話し合つて居なさいました。』

種々聞いて見ても、禁裡守護の薩長の兵が、意外に少ない事は事實で有るらしかつた。信濃守は王政維新の大業を、薩長の私から築き上げた空中樓閣と信じて居た。彼等の攘夷や維新の旗幟は、德川幕府を覆へして、己れが取つて代る迄の手段だと思つて居た。若しも夫が取つて代れずして、其儘騎虎の勢ひに驅られて、王政の昔に返り、天子自から政を攬はすやうになれば、夫は彼等の八百長崩れの結果で、彼等の初志ではないと言ふ事を



堅く信じたから、何とかして、一矢を彼等の頭上に酬ひ、棹尾の一擊を與へて、思ひ知らせんものと願つたのだ。

## 不利の策

大阪から押して上洛するのが、朝敵の汚名を蒙る結果を喚起すに違ひないと、若年寄の井上河內などは酷く危踏むだ。夫よりも海路江戸へ還御になつて、諸代の大小名を集へ、一應評定を盡したがよからうと言ふ事だつた。

臆病風の吹く人々には、此說に雷同する者が有つて、殆んど軍艦を天保山沖へ差廻さうと迄なつた時に、突然朝廷から、前將軍家の上洛を促して來た。

此勅使の一言は實に靑天の霹靂と鳴りはためいたので有る。此方から押して上洛しやうとする時に、反つて彼方から招かれる、其事が果して善か惡か。

恐慌に攪拌されて、戰々兢々たる役人達は、全く方向に迷つて、濁つた霧の中を還ひ廻る有樣だつた。其多くは禁裡の優渥な思召は、只感泣の外はない。急いで御上洛になれ

ば　御褒辭が下つて、御加恩になるに違ひないなどゝ言つた。

永井信濃守は最後まで默して居たが、頓て京都の樣子を語つて、彼等の迷霧を覺ますべく口を開いた。

『此度上樣御上洛の恩命、御所樣より下されましたは、決して御當家に幸有るものではムりませぬ。揣者が間者を入れて樣子を搜つた處に因りますると、此難有き恩命は、御當家を滅亡の谷に導く惡魔の聲でムりまするぞ。成程勅使下向の上からは、紛れも無き御叡慮とは存ずるが、此勅命を當家に下し置かれる迄には、暗闇の中に樣々な傀儡が行なはれましたのぢや、君側の奸物共は、恁樣に致して、上樣を誑き寄せ、若し當方が小勢の御供なる時は、直に取込めて、上樣を押籠め奉り、又多勢なる時は、途中に押止めて爭ひを惹起し、朝敵の名を誣ゐる謀略に紛れ有りませぬ。』

信濃から恁言はれて、列座の人々は、夜が明けたやうな心地がした。

『如何樣、……永井殿の御分別、御尤もの儀にムりまする。左樣ムれば之に對して、如何なる手段を執りまするか、願はくは貴意を承まはりたい。』



『さればでムる。萬全の策としては、上樣此儘に江戸へ御引上げ遊ばし、靜かに形勢を見る事でムるが、左樣有る時は、勅命を奉ぜぬといふ事を以て、御咎に相成るは鏡にかけて見る如くで、勅使下向は卽はち此目的に外なりませぬ。第二には御供廻りを減し、尋常一樣の參內でムりますが、之は忽ち奸賊の乘ずる處となり、上樣は改易押込といふ咎人扱ひをお受けなされるに相違ムらぬ。然る時は之も容易ならぬ大事でムる。第三に直參の兵に會桑二藩の軍勢を併せて警護となし、鑿々堂々と御上洛有る時は、途中忽ち食ひ止められて、必死の戰と相成り、上樣は朝敵の汚名をお取りなさる、以上の策は孰れも不利益ながら、此不利益を忍んでも、三つの一つを取らねばならぬ事と相成つてムる。』

人々は當面の難題を捌き兼て、只片唾を呑むばかりだつた。

『各々方は、以上三つの中、孰れをお取りなされまするか。』

『されは信濃殿は。』

『拙者臆面もなく申陳じれば、第三の策でムる……と申すのは、第一は勅命を奉ぜざる不逞の臣となつて、オメ〳〵江戸へ蟄居致す事、武門武士たる者の本懷ではムらぬ。第二は

上様を火中に投じ奉ると同様、御同様臣たる者の道ではムらぬ。第三は或ひは一時朝敵の悪名を着るとも、戰にさへ打勝てば、奸賊を追ひ退け、禁裡を奉じまつるに因つて、今日の朝敵は明日の忠臣となり、主客處を異にする次第でムる。死地に入つて活を求むる手段とも申しませうか。拙者は之より外道は有るまいと存ずる。殊に京都は目下手薄に致して、案外底力の無い形勢でムる。』

恁言はれると、人々は夫に反對する説も持たなかつた。のみならず血氣盛んの若殿輩は老臣重役の因循姑息が、機宜を誤り、德川の流れを細くしたのだと憤慨するから、信濃の説を洩れ聞いて、日頃の鬱憤を晴すは此時とばかり、案を拍つて喜んだ。

此の如くして前將軍上洛に伴ふ大激戰は、明治維新の序幕として、華々しく開始されたのだ。

## 五彩の虹

晴るゝとも曇るとも無く、一面に重く垂れた雲の幕は、暗澹として低く迷ひ、悲しく漂



ひ流れた。其黎明を旗鼓整々として金扇の馬標を押立て、鳥羽伏見兩街道より京都を差して進發する幕軍の先手は、驃騎無比を以て聞えた會桑二藩の逞兵、只一氣に乘込まんとしたが、豫て間者に因つて、幕軍の動靜を知れる官軍は、疾に兩道に防禦の兵を配置し、伏見口は長藩鳥羽口は薩藩、之に外様諸藩の禁裡守護の兵を加へて、忽ち之を食ひ止め、一歩も入れじとした。

幕軍は勅命に因つて上洛する前將軍家を阻止するは奇怪だと有つて、忽ち先鋒の爭ひとなると、官軍方から洞然として大砲を射出した。

此一發の爲に、旗本勢菅野半左衛門、小此木六郎以下五人を殪し、續いて釣瓶かける砲撃の爲に、多勢の負傷者を生じた。敵は無理にも幕軍を朝敵に落さねばならぬのだから、其砲撃により、どうでも幕軍が大擧して攻め寄せねばならぬやうに仕向けた。

果せる哉、會桑二藩の先鋒は、此砲撃に奮迅の怒を爲し、雨霰の彈の中を、白刃を振閃めかして殺到した。弦を放れた矢は止まる處を知らず、喚き叫んで力戰する。

兩街道を壓する砲聲は、百雷の一時に奮ふが如く、兩軍互角の勢ひを以て、火の出づる

迄に奮戰した。幕軍の旗色は寧ろ鮮やかで、戰酣なる頃には、次第々々に地歩を占め、伏見口は殆んど京都へ攻め入らん斗りになつた。此時後續部隊さへ有つたならば、懸軍長驅立處に洛中へ乘込んだので有つたが、肝腎の將軍家が逡巡姑息の二の足を踏ませられ一に朝敵の汚名を蒙むるが恐ろしさに、徹底的に士氣を鼓舞されなかつたので、先鋒は折角實の山に入りながら、空しく手を拱ねいで佇ずまねばならなかつた。其中に官軍は忽ち頽勢を盛返して來て、鳥羽口の幕軍先破れ、伏見口は後方との連絡を斷たれんとしたので、臆病なる旗本勢は、蜘蛛の子を散すが如くに敗走したから、勇敢なる會津勢も、夫に煽られて隊形を保つ事が出來ぬ迄に敗れた。

僅か數刻の前迄、武門の華と誇つた幕兵の最期は、實に慘憺たるもので有つた。到る處に血煙さき追擊戰は行はれ、幕軍將士の首級が、水瓜や南瓜のやうに、血碧の中に投捨られた。

此日の戰は序幕を切つて落した斗りで、然も決勝的の大戰で有つた。幕軍は全く隊形を紊して、大阪城へさへ入る事が出來ず、落武者となつて、四方に逃げ隱れるに至つた。



此酣甲斐なき敗軍の中に立つて、味方を罵しり激まし、一歩も退かじと、必死の勇を鼓して奮戰する殊勝の武士が有つた。

數刻の激戰に數ケ所の手を負ひ、流血淋漓として凄風面を向く可らざるものが有るが、固く死を決したと見えて、續く味方の無きにも拘はらず、追縋る敵を斫り捨て、更に引退かんともせずに、吻と深い溜息を洩らすと、宛ら火炎を噴くばかりに、五彩の虹を現ずるかと凄じかつた。

此時暇の間の小逕から、裝束嚴めしき三人の官軍が、味方の勝誇る戰の跡を見るべく威風凛々として來懸つたのが、端なくも木の根に憩ふ幕軍の勇將と出逢つた。

三人の官軍は、思ひがけぬ拾ひ物でもしたやうに、左右より引包んで、只一人を討取らうとした。

勇將は敵と見て、屹度立上り。刀を引添えて相對したが、官軍の頭人と鋭き目を見合せて靈、少時息を詰めて睨み合ふばかりだつた。

『珍らしや貴殿は永井信濃だな、相手に取つて不足は無い。イザ勝負致せ、拙者は四木左

膳ぢや。』

亂軍の中に戰ひ疲れた信濃守は、無念の腹を搔きさばかうと覺悟した處へ、偶りなくも好敵手が現はれたので、俄然として滿身の勇を揮つた。宛ら駿馬が鬣を揮つて、朔風に嘶なくの慨が有る。

『オウ不思議な對面ぢや。……いざ。』

恁言ふかと思ふと、二人は大刀を打振り、一歩も退かじと戰つた。信濃に取つては、多年怨重なる敵では有るし、友江の爲にも、不倶戴天の仇で有る。此男の爲に、如何ばかり妨げられたか知れぬと思ふ憤怒が、一層の勇氣を反撥させた。

左膳に取つては、信濃守は好敵手で有る、今眼の當り良に懸つた鳥を、如何で打洩らすべきかと、人交もせず打合つた、二人の足は大地を嚙み、面色蒼褪めて惡鬼の如く、精を絞る冷膏は、ジリ〳〵と額口に浮かみ出た。

數十合の奮戰も、空しく火花を散らす斗り、左右なく勝敗を決し兼ると見るや、左膳の部下は猶豫ならじと拔き連れて取圍み、あわや信濃守も亂刃の下に殪れんとする時、



『ヤイ、卑怯な奴等だ、退けッ。』

飛込んで來たのは、例の三吉で有つた。彼は友江の供をして、信濃守を搜し索めて居たのだが、亂軍の落武者に駈け隔てられて、終に友江と相失ひ、其處彼處と尋ねめぐる中に端なくも信濃守の危急を見出したのだ。

『ゑいッ　邪魔致すな。』

一人が斫込んで來るのを、三吉は飛込んで横に拂ふと、彼はバツタリ前にのめつたが、夫と共に今一人の打込むのを防ぎ兼て、脾腹を拳下りに切り裂かれたので、此江戸前の俠骨は、二言と言はず綷切れた。此時此方の二人は、互ひに微傷を負ひながら、益々氣力を勵まして、殊死して戰つたが、左膳は新手の勇士なるに、信濃は朝からの戰ひに疲れて居るので、次第々々に退足となり、漸く危うくなつた處へ、突然彼方の藪蔭より起る一發の銃聲は、左膳の眞向を射拔いたので、呀と叫ぶと共に、仰向けに仰反り倒れた、夫と同時に信濃守も氣が緩むで、其場へ蹲まつて了つた。今一人の敵は、援兵有りと見て、雲を霞と逃げ失せた。

藪の中より顯はれたのは、花恥かしき顏を陣笠に包んだ友江の軍卒姿で有つた。彼女は幕軍敗北と聞くや、三吉諸共信濃守の行衛を搜すべく、多勢の中へ紛れ込んだのだ。

『殿樣、友江でムります。御氣を慥かに。』

疲れ拔いて蹲まる信濃の肩に手を加へた。

『オウ友江か、殊勝な働らきぢや、左膳は其許の一發で殪れたが、敵ながら惜しいもので有る。……三吉も彼通りぢや。拙者も生害致すであらう。其許は敵の目にかゝらぬ中に、早く引上げられい。』

『えゝ。何と仰せ遊ばします。殿樣が御切腹遊ばしたら、御上はどう遊ばします。早く妾におつかまり遊ばせ。立退きますでムりましやう。……妾は決して殿樣をお殺し申しませぬ。』

『厚けないが、生中雜兵共の手に懸るは殘念ぢやわい。』

『いゝへ、人は生きられるだけ死んではなりませぬ。夫でも死なねばならぬ時は、友江も御伴を致しまする。』



『オウ、其許は左迄に思ふて呉るか。』

『殿樣、友江は殿樣の爲に生きて居りまする。』

と言つて、彼女は柔かい手で、溫たかく信濃の手を執つた。

『厚じけない。』

信濃守の眼には、火のやうな感謝の光がきらめき、友江の鮮かな眦には、溫かき春の陽炎が色めいた。殺伐なる血の泉の中に、一脈の春風が亘つて、笹鳴く京の鶯は、蹌踉き行く手負と、優しき人とを目送した。

伏見鳥羽の戰は軈て上野の靑葉の嵐となり、奥州の戰亂を釀し、更に五稜廓の火花と消えて、維新の天下は全く泰平に復した。幕末の遺臣永井信濃守の別業なる、向島秋葉嗣畔の靑松處には當年の夢を一醵に附して、花鳥風月を友とする主人直臣と、友江の年と共に嬋娟たる姿とが、藹長けき對照となつて、四邊の語草となつて居た。然し誰ケ袖の源兵衛のみ、杳として消息を聞かないのは、友江の心殘りで無らなかつた。

# 落陽の誇（をはり）


◈近刊豫告◈

前田曙山著

情　穢　傳

四六版
函入美裝



昭和二年十二月一日印刷
昭和二年十二月三日發行

（定價　壹圓五拾錢）

落陽の誇

著作者　前田曙山
日本橋區馬喰町四ノ十六

發行者　久保田長吉
神田區元久右衛門町二ノ四

印刷者　岩見米三郎

發行所　東京市日本橋區馬喰町四ノ十六
獨立閣書店
振替東京一七一九九番

**Kodak** Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

**Kodak** Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black